

七 朝鮮通信使來朝記録

江戸時代、將軍の代替りやそのほかの慶事に、朝鮮王から遣わされた祝賀使のことを、朝鮮信使または通信使と呼称した。

日本と朝鮮の国交は、八世紀以来ほとんど断絶の状態にあった。それが一五世紀にはいつて、足利幕府が国交を開き、以来豊臣秀吉の朝鮮出陣時代を除いて、通算四五〇年余にわたって外交関係を続けた。したがつて、徳川幕府による朝鮮との外交関係の設立は、豊臣秀吉の朝鮮出陣によつて、中断していた国交を回復したことになる。つまり徳川幕府は、長崎においてオランダとの貿易によつて、東南アジア・ヨーロッパと交易し、一方では朝鮮との関係を改善し、国交を開いたのである。

徳川幕府による国交回復工作は、当初朝鮮側の厳しい対日感情のため、容易ではなかつた。しかし徳川家康の積極的な働きかけと、両国の中間にあつた対馬藩の工作によつて、慶長二二年（一六〇七）に、第一回目の使節団を迎えることができた。以来二六〇年の幕府治政下にあつて、朝鮮側から二二回にわたつて通信使が日本に往来したが、文化八年（一八一二）が最後の使節団派遣となつた。このときは対馬で応対したにとどまつてゐるが、恐らく通信使を江戸に迎える過程での、ばくだいな経費を節約するためであつたのであろう。

この国交回復は、日本側の働きかけに対して、朝鮮側が答えるという外交姿勢がとられ、これは江戸時代全期間を通じて貫く性格となつてゐた。具体的には、幕府の将軍が交替すると、対馬藩主宗氏が朝鮮側にこれを告げ、通信使の派遣を要請する。これにともない、朝鮮側では通信使の正副三使を任命し、三〇〇名から五〇〇名にもおよぶ使節

団を派遣した。

徳川幕府の新将軍は、通信使を国家的行事として迎え、国内にその権威を強く印象づける目的を持つていた。一方朝鮮側からすれば、日本觀察を通じて、再び朝鮮出陣の意図なきかを、把握する重要な使命が課せられていたのであった。したがつて通信使は、実に詳細にわたつて日本觀察を行つた記録を残しており、一方では、日本の文化人たちの通信使にかける期待は大きなものがあつた。沿道の旅館に滞在中の通信使一行に面会を求め、文学・書画について問答を交し、その歴史や風俗を尋ねるのが通例となつていたのである。

通信使は海路にて、対馬—壱岐—下関—神戸—大阪に至り、陸路にて、枚方—京都—大津を経て美濃に入った。その際、小熊川（羽島市）などの河川には、船橋が架けられて渡河したが、船橋架設の役目は、諸藩・旗本などの課役であつた。

ここに収録した史料は、旗本川辺大嶋氏が、その役目を果たした延享四・五年（一七四七・八）を中心とした記録である。連絡書簡の往来の様子や、事前に準備した諸材料の明細、人足の手配から、渡船に至るまでのことが記述されていて、かなり重要視された職務であったことが推察できる。

一卯二月六日 笠松御役所より、書状到来文言左之通

一筆致啓上候、然は朝鮮人来朝之節、小熊川舟橋懸

渡之儀、従前々雲八様・竹中左京様・大嶋雲四郎様

御立会にて御掛渡被成候由、尤橋板木材等は御入用

にて買上、自此方相渡申事之由、前々笠松御郡代申

送ニ候、來辰年朝鮮人来朝ニ付、右御用掛り前格之

(解説)

延享四年（一七四七）二月より一二月までの、使節団來訪にともなう諸準備記録である。笠松役所よりの

來信、諸役請負の船橋架設の事前打ち合わせ、船橋の規模

と諸材料の明細、および諸道具・人足などの割り当てなど

の記述がある。これに關係した領主は、加茂・武儀・各

務・大野・池田各郡の広範囲に及んでいる。特に往復書簡

の内容から推察して、船橋架設までの並々ならぬ配慮を、

うかがうことができる。

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

通、次郎九郎え被仰付候、依之右船橋懸り組合之儀、書上候様ニと御勘定所より申来候、右之通書上候ニ付、為御心得申遣候、若相違之儀も候ハハ可被仰聞候、右之段各様迄可申進旨、次郎九郎申ニ付如此御座候、恐惶謹言

二月六日

西村佐七判

村上郡八判

佐藤丈太夫判

大嶋三郎右衛門様

右之書状從笠松飛脚ニて、二月六日晚景參着ニ付、

川辺ニ一宿申付翌七日朝差戻候事

二月七日 笠松え之返書左之通

貴札致拝見候、然は朝鮮人来朝之節、小熊川船橋掛

辰歲朝鮮人来朝ニ付諸事覚

小熊川御船橋用諸事留日記

大嶋三郎右衛門

(表紙)

延享四丁卯歳二月ヨリ

一

渡之儀、前々より竹中左京様・大嶋雲四郎様此方立会にて掛渡仕候、尤橋板材木等は御入用にて御買上、自其許御渡被成候儀、前々笠松御郡代御申送りニ候由、來辰年朝鮮人來朝ニ付、右御用懸り前格之通次郎九郎様え被仰付候、同夜右舟橋懸り組合之儀、御書上候様ニと從御勘定所申来、右之通御書上候ニ付、為心得被仰下候由、若相違之儀も候ハハ可申上旨、

右之段拙者共迄被仰聞候様ニと、次郎九郎様仰之趣委細承知仕候、於此表も先規之書付帳面等相改、三所申合其節ニ至各様迄御引合可申候、尤右為御知之段雲八方え可申聞候、右為御答如此御座候、恐惶謹言

言

二月七日

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

被下候以上

大嶋雲八美濃國知行所村高書付

濃州賀茂郡

川辺中番村

尚以御飛脚及晚景參着ニ付、一宿申付差戻申候以上

一二月廿九日 笠松從御役所書狀到来、文言左之通

八百武拾弐石五斗七升壹合

内

古 高

一筆致啓上候、然は雲八様當國御知行所、村高別紙案文之通御認メ、三月廿日迄ニ笠松役所迄被遣候様致度候、右は來辰年朝鮮人來朝ニ付、當國舟橋御入用之品々、割賦之儀ニ付入用ニ御座候、尤先年之高附も御座候得共、若御分知増減等も難斗候ニ付、右之段可申進旨次郎九郎申ニ付如此御座候、恐惶謹言

二月廿九日

西村佐七判

村上郡八判

佐藤丈太夫判

大嶋三郎右衛門様
羽渕六郎右衛門様

追啓、享保年中以來御分知も御座候ハハ、御分知之

御方様御姓名、村高共御書付被遣候様ニ仕度候、且又新規御拝領之分も御座候ハハ、是又御書付被遣可

被下候以上

大嶋雲八美濃國知行所村高書付

濃州賀茂郡

川辺中番村

村山郡八様
西村佐七様

武拾五石三斗七升四合

同國同郡
改出新田

一高四百九石四升七合六勺

内

三百五拾八石五斗八升

古 高

五拾石四斗六升七合六勺

改出新田

右賀茂郡之内武ヶ村
小以千武百五拾六石九斗九升武合六勺

濃州武儀郡
閥

一高千六百石

村

内

千式石三拾六石武斗

古 高

三百六拾三石八斗

改出新田

高合式千八百五拾六石九斗九升武合六勺

但拝領高改出新田共

右は大嶋雲八濃州知行所、村高書面之通御座候以上

延享四年卯三月

大嶋雲八内
羽渕六郎

大嶋三郎右衛門印

右之帳面直紙にて相認候

一三月十四日 右帳面笠松御役所え差出候ニ付、添状

之文言左之通

去月廿九日之貴札致拝見候、然は雲八當國知行所、

御追啓致承知候、享保年中以來分知、且亦新規御領等之品無御座候、左様思召可被下候以上

右之通從閥表笠松御役所え為持遣候事

一三月十五日 笠松從御役所返状文言左之通

御飛札致拝見候、然は雲八様當國御知行所高附之儀、先達て委細得御意候處、御認被遣請取申候、右為御

村高御案文之通相認、當月廿日迄其許御役所迄、
差出候様ニ被成度候、右は來辰年朝鮮人來朝ニ付、
當國船橋御入用之品々、割賦之儀ニ付御用ニ御座候
由、尤先年之高附も御取持候得共、若分知增減等も
無之哉、御聞被成度之段、次郎九郎様被仰付候旨奉
得其意候、則別紙ニ相認差出候間、御請取可被下候、
若思召も御座候ハハ可被仰聞候、早速認替進達可仕
候、右御答旁如此御座候、恐惶謹言

三月十四日

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

佐藤丈太夫様

村山郡八様

西村佐七様

再報如此御座候、恐惶謹言

三月十五日

村山郡八様
西村佐七様

西村佐七判
村上郡八判

佐藤丈太夫判

尚以助次郎様え伍藤佐太右衛門方より、書状壹通差
越候間、是又御届申候以上
右之通從関表笠松御役所え為持遣候事

一四月十八日 笠松從御役所返状文言左之通

貴札致拝見候、各様弥御堅固被成御勤珍重奉存候、
然は自雲八様、次郎九郎方え御書状一封、江戸表よ
り被差越候ニ付被遣之、次郎九郎え相達候處、則御
報差進候間口上可被下候、右為御報如此御座候、恐

惶謹言

四月十七日

一四月十七日 笠松青木次郎九郎様え、江戸表より御
書状差登候ニ付、右御役所迄差出候、添状文言左之
通

一筆致啓上候、先以各様弥御堅固可被成、御勤と珍
重奉存候、然は次郎九郎様え雲八方より、書状壹封
江戸表より差越候間、為持進之候御差上可被下候、
右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

四月十七日

大嶋三郎右衛門様

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

尚以助次郎方え、伍藤左太右衛門殿より之書状壹封
被遣、早速相達申候以上

一五月十四日 夕笠松從御役所飛脚到来、書状文言左

佐藤丈太夫様

之通

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は來辰年朝鮮人來朝之節、小熊川舟橋懸渡之儀、享保年中來朝之格を以掛方取調、御入用積等仕立申上候様ニと、今度於江戸表次郎九郎方え被仰渡橋之儀先達て被仰聞候通、雲八様並竹中左京様・大嶋雲四郎様御立会之儀ニ御座候間、懸方先格之御引合申度候間、御三所被仰合右御用懸り之御役人中、近日御出被成候様ニ致度候、右之段可申遣旨、次郎九郎申付如此御座候、恐惶謹言

五月十三日

西村佐七判
村上郡八判
佐藤丈太夫判

羽渕六郎右衛門様

大嶋三郎右衛門様

右之飛脚晚景參着ニ付、川辺ニ一宿申付翌十五日朝差戻候事

五月十五日

笠松え之返書左之通貴札致拝見候、先以各様弥御堅固被成御勤珍重奉存

候、然は來辰年朝鮮人來朝之節、小熊川舟橋渡之儀、享保年中來朝之格を以懸方取調、御入用積等御仕立被仰上候様ニと、今度於江戸表次郎九郎様え被仰渡候、右船橋之儀、先達て被仰下候通竹中左京様・大嶋雲四郎様・雲八立会之儀ニ御座候間、掛方先格之儀御引合被成度候間、三所申合右御用掛之役人共、近日其御地え罷出候様ニ被成度候之旨、御紙面之趣承知仕候

右為御答如此御座候、恐惶謹言

五月十四日

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

佐藤丈太夫様
村山郡八様
西村佐七様

右之返書相認、十四日晚飛脚之者え相渡、翌十五日朝差返候事

五月十五日

昼夜間より使ニて書状到来文言左之通一筆致啓上候、弥御堅固可被成御勤珍重奉存候、然は來辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川舟橋懸渡之儀、先

格之通其許様・竹中左京様・雲四郎え被仰付候間、

万端申合相勤候様ニ、先達て江戸表より被申越候、

其表えも定て右之御沙汰可有御座と存候、万事申合

相勤候ニて可有御座候、左様御心得可被下候、且亦

右舟橋懸渡等之御用方は、旦那方ニては用人共相勤

來候ニ付、今度も所勝右衛門右御用懸り相勤申候、

諸事申合相務候様ニ申談候義御座候、其表より御出
役之御衆中方えも、無御隔意被仰談、被下候様ニ御

沙汰可被下候

一昨日笠松御郡代青木次郎九郎様、元々中より使被差
越、右船橋懸渡先格等之儀、引合被申度候之間申合、
右懸り之役人罷出候様ニと、次郎九郎様御意之由被
申越候、仍て上保村勝右衛門方え即刻申遣、岩手承
合日限相極申越候様ニと申遣候、定て今日承合罷出
候日限等、明日は可申越と存候、左候ハハ早々御案
内可申候間、左様御心得可被下候、尤其許ニても岩
手被仰合日限、御極メ可被仰下事ニ存候得共、遠方
之儀急ニ御手合難成、可有御座と存候ニ付、如斯得
御意候事御座候、笠松えも勝右衛門罷出候間、左様
御心得可被下候、此等之趣得御意度如斯御座候、恐

惶謹言

五月十五日

服部次郎右衛門判

羽渕六郎右衛門様

右之通書状到来ニ付、則返状文言左之通

御使札致拝見候、先以弥御堅固被成御勤珍重奉存候、
然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川舟橋掛渡之儀、

先格之通雲四郎様・竹中左京様・雲八え被仰付候
間、万端申合相勤候様ニ、先達て江戸表より申参考
由、此表えも右之段申來候、万事申合相勤候様ニ可
仕候、且亦右舟橋懸渡等之御用方は、其許様ニては
御用人衆御勤來候ニ付、今度も所勝右衛門殿、右御
用懸り被成御勤候由諸事被仰合、此表より罷出候者
不案内ニ御座候間、勝右衛門殿えも右之段御通達可
被下候、先年も御勤之儀故安堵大慶仕候

一昨日笠松御郡代青木次郎九郎様、元々中より使被差
越、右船橋掛渡先格等之儀、引合被申度候間申合、
右懸り之役人罷出候様ニと、次郎九郎様仰之由申参
候ニ付、同夜上之保村勝右衛門殿方え早速被仰遣、

岩手御聞合日限相極メ、被申越候様ニと被仰遣候、定て今日御聞合日限等、明日は可申參と思召候、左候ハハ、此方えも早々可被仰知之旨、委細御紙面之趣致承知候、尤此表えも昨日從笠松右之訳ケ申來候付、自是も其他岩手えも、以使札右之段可得御意と相認候処え、預御使札被入御念、岩手御引合之儀も、其表より被仰遣候被下候由、御心入之段忝奉存候、尤笠松えも勝右衛門殿、御越候筈ニ御座候由得其意存候、右為御答如此御座候、恐惶謹言

五月十五日

大野隼介判

大嶋雲八様御内
羽渕六郎右衛門様

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

服部次郎右衛門様

右之通返状相渡使之者差戻候事

一 五月十六日 朝從岩手飛脚到来書状文言左之通以廻札致啓上候、各様弥御堅固被成御勤珍重奉存候、

然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋掛渡之儀、享保年中之通御両所様申合懸渡候様ニ、先頃穂元攝津守様於江戸表、留主居之者え被仰渡候、定て御両所様御同様之御儀奉存候、右ニ付笠松青木次郎九郎

様御役人中より、如先年御入用御積方彼是御引合可被成候間、各様申合近日可致參上旨申來候、則來札掛御目候、御覽之上御戻シ可被下候、笠松え罷出候日限御究メ被成可被仰聞候、遠方之事故此方ニても難相極メ、其御地ニテ御究メ被仰聞可被下候、其節拙者罷出可申候、万端笠松旅宿ニテ御相談仕、御役所え御同道可罷出候、右為可得御意如是御座候、恐惶謹言

五月十五日

存候、右為御答如此御座候、恐惶謹言

諸事相勵候様ニ、被成可被下候以上

右之通書状到来ニ付、則返状文言左之通

御廻札致拝見候、先以弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋懸渡之儀、享保年中之通、左京様・大嶋雲四郎殿・雲八申合掛渡候様ニ、先頃穢元摠津守様於江戸表、御留守居衆え被仰渡候由、定て此方も日限之儀と思召候、右ニ付笠松青木次郎九郎様御役人中より、如先年御入用御積方彼是御引合可被成候間、三所申合近日可罷出旨申参、則來札被成急セ被入御念儀ニ御座候、尤近遣仕候笠松え御出候日限之儀、此方より相究メ可申越様ニ被仰下候、左候ハハ來ル廿一日頃、笠松え御出被成候様ニ仕度候、彼地旅宿之儀心當は無御座候得共、參り懸り候て旅宿相究メ候より外致方無御座候、尤何方成共先キえ御着之方より亭主え被仰付、跡より御着之方無間違出立候様ニ可仕候間、左様御心得可被下候、古橋村庄屋共之儀も、笠松旅宿え着候以後、早々彼地より呼ニ被遣、參次第御役所え被召連可然歟と存候、兎角三所御出会之上ニテ御相談可被成候、右之儀ニ付自是も今日飛脚差立可申と、

昨日書状認懸ケ候処、迫間服部次郎右衛門方より使札被差越候、其御地えも所勝右衛門方より飛脚差立、日限御究メ被下候様ニ得御意候間、右返報參次第勝右衛門方より、迫間次郎右衛門方え、右承合之儀相知レ候ハハ、早々此方えも通達可有之由被申越候ニ付、右飛脚も差止メ御左右相待罷在候、其許様より日限御究メ、勝右衛門方迄御返答被成候ハハ、其日限相用此方役人差出可申候、若又日限不被仰下候は、弥廿一日ニ相極メ可申候、此段迫間えも申達候儀ニ御座候、尤此方より日限相究申遣候儀、如何ニ存候得共、彼是申候内及延引候ニ付、思召も不顧相究メ申進候、委細御紙面之趣致承知之候、右御報為可得御意如此御座候、恐惶謹言

五月十六日

大野隼介様

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

尚以貴様御儀、右御用向被蒙仰候由、乍御太儀珍重奉存候、段々被入御念候御紙面之趣致承知候、且亦於此方も右御用向、吉田金左衛門と申者被申付候間、

万端無御隔意被仰合可被下候、不案内之儀ニ御座候

間、諸事被添御心被遣、可被下候奉頼候、然所右金左衛門、此節少々不快ニ罷在候間罷出不申候、同夜今度は外之者差出可申候間、宜被仰合可被下候

一被仰出候御書付御写壱通、為見被成拝見仕候、入御念儀ニ御座候則返遣仕候

一右日限之儀其表より御究メ、勝右衛門方迄被仰聞候ハ、弥其通りニ相極メ差出可申候、若不被仰聞候ハハ、廿一日ニ相極メ可申候間、左様御心得可被下候以上右之通返報相認差遣申候事

秋元摂津守様被成御渡候 御書付写

覚

来辰年朝鮮人就來朝、濃州小熊川船橋之儀、大嶋雲八・大嶋雲四郎被申合如先年可被掛渡候、尤番人等之儀も、如前々可被心得候、美濃郡代青木次郎九郎えも、右之段申渡候以上

四月

右之御書付写岩手より到来ニ付、此方ニも写置候事一五月十六日 昼上ノ保所勝右衛門殿え之書状、文言

左之通

今朝岩手より之飛脚到来、連名之御廻札相達致拝見順廻仕候、先以不勝之天氣相ニ候得共、無障弥御堅固可被成、御勤と珍重奉存候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋掛渡之儀、雲四郎様・竹中左京様・雲八立会之儀ニ御座候間、掛方先格等之儀御引合被成度候間、三所申合右之御用懸り役人、近日笠松え差出候様被成度之旨、次郎九郎様被仰由ニテ、

元メ衆より拙者共方え以飛札被申越候、同夜右可及御相談と存、昨日書状認懸り岩手・迫間えも自是可得御意と存候処、服部次郎右衛門殿より被仰下候は、右笠松え罷出候日限之儀、貴様え被仰遣、岩手御役人衆より日限相極メ、被仰越候様ニ得御意候間、右返札貴様え参考次第、迫間迄委細可被仰越候之間、此方より岩手え、承合ニモ及間敷之由被仰下候ニ付、右飛脚も相止メ御左右待合罷在候、然所岩手より今朝飛脚到着、大野隼介殿より右御用向委細被仰聞候得共、日限之儀此方ニテ相究メ候様ニ被仰越候、御存知之通先年は、肥前守御役儀被相勤候ニ付、岩手より先達て諸事世話も仕候様ニ御座候得共、唯今ニ

ては雲八無役之儀故、前方とハ意味も違候様ニ相心得罷在候、然共御三所遠方之懸合ニ御座候故、致謙退候ては當用及遲滯如何ニも存候得共、來ル廿一日笠松え御出立被成候様ニ、仕度之段申遣候間、貴様ニも弥廿一日、笠松え御出立被成候様ニと奉存候、然共從貴様之御聞合ニ、岩手より若日限御究メ被遣候ハハ、其日限相用此方より役人差出可申候、此方え岩手より飛脚被差出候、跡え其許様より之御人參候ハハ、日限御極メ不被遣候儀也可有之哉と存候ニ付、岩手並迫間之思召も不顧、日限相極メ得御意候間、間違無之様ニ仕度存候、右御用掛り、吉田金左衛門も相勤候筈ニ御座候得共、此節風氣ニ罷在候間、得罷出申間數候、重てハ金左衛門可罷出候間、不案内者之儀、被添御心被仰合被遣可被下候、此度は外之者代リニ可罷出候間、尚又笠松表首尾好相勤候様ニ御引廻シ被成、可被下候奉頼候、將亦古橋村庄屋共被召連候儀、何も御出会之上ニテ、宜様ニ相談可罷成と存候、右之趣為可得御意如此御座候、恐惶謹言

五月十六日

所勝右衛門様

大嶋三郎右衛門判
羽渕六郎右衛門判

尚以岩手え之返書壹通相認遣申候間、乍御世話御一所ニ被成、被遣可被下候以上

右之通相認、上ノ保え岩手より之飛脚之者、持參罷越候事

一 五月十八日 朝迫間服部次郎右衛門殿え、右笠松え罷出候日限、上ノ保勝右衛門殿より、弥廿一日ニ可罷出旨申參候哉、如何承度段飛札を以差遣之候、同晚返書到来候処、其後上ノ保より沙汰無之候得共、兼て從此方の日限相極メ候通ニ、可罷出旨先達て申得罷出申間數候、越候間、弥廿一日ニ可罷出と存候由申來候事、但右之飛脚西垣七右衛門差遣之

一 五月十九日 上ノ保所勝右衛門殿より返書、閑より到来文言左之通

一 昨十六日之貴札、昨十七日辰時相達致拝見候、如仰不勝之天氣合ニ御座候得共、弥御堅勝被成御勤珍重奉存候、然は從岩手一昨朝其表え飛脚到来、御連名之廻状參候ニ付、御披見之上被遣之致一覽候、且

來辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋掛渡之儀、雲八様・竹中左京様・雲四郎、御立合之儀ニ御座候間、掛方先格等之義御引合被成度候間、三所申合右御用掛り役人、近日笠松え差出候様ニ被成度候旨、次郎九郎様被仰候由ニて、元メ衆より各様え以飛札被申越、依之右之段御相談可被仰聞と、昨日御状御認懸り、岩手迫間えも其表より可被仰遣思召候処、服部次郎右衛門方より得御意候は、右笠松え被成御出候日限之儀、拙者方え申越岩手え致通達候上、岩手役人中より日限相極メ、被申越候様ニ致候間、右返札參次第、迫間え通達御出会日限之儀、従迫間可得御意候間、従其表岩手え、御聞合ニも及間敷候旨申遣候ニ付、御延引一左右御待被成候処、岩手より一昨朝飛札ニテ、大野隼介殿より右御用向委細之儀申参、御出合日限之儀、其許様より御極メ被成候様ニ申來候由、先々年は肥前守様、御役儀も御勤被遊候ニ付、岩手より先達て諸事御世話も被成候得共、唯今ニては御無役之儀、前方とハ意味も違候様ニ御心得被成候、然共御三所遠方之懸合ニ御座候処、御謙退被成候ては、當用及遲滯如何御座候故、来ル廿一日笠松

え御出会可被成旨被仰遣候由、委細御紙面之尤奉存候、依之拙者儀も来ル廿一日、罷出可申候旨得其意奉存罷出可申候、且拙者より岩手え日限承合候処、即日其表え日限御極メ被仰遣候様ニ、廻状を以申進候間、此方より極メ候様ニと申來候間、弥廿一日岩手よりも、御出会可在之と奉存候、尤岩手え拙者返事ニも、来ル廿一日昼時分ニ、笠松え着候様ニ罷出可申之旨申遣候、左様御心得可被下候、右御用懸り吉田金左衛門殿、被成御勤候筈ニ御座候得共、此節御風氣ニ御座候間、得御出被成間敷候、重てハ金左衛門殿御出可被成候、御不案内御座候間、万端申合候様ニ被仰聞得其意奉存候、此度之儀は外之御方、御出可被成候間、笠松ニても首尾好被成、御勤候様ニ可仕旨被仰聞、被入御念御儀御座候、諸事御互無心置御相談可得御意候之間、此段被仰通置可被下候古橋庄屋共被召連候儀、何も御出会之上ニて可宜様ニ被仰聞候得共、岩手より申來候儀、先年も小熊笠松え拙者共罷出候度、毎罷出候様ニ相見え申候、其上先年は岩手其表え、御互御文通取次等も仕候、何角之儀承合申度儀も、可有之哉と奉存候、古橋えは

此方より程近ニ御座候ニ付、来ル廿一日右御用ニ付、三所笠松ニて出会申候間、罷出候様ニ可申遣奉存候、尤岩手えも右之段申遣候、且亦此度ハ庄屋共、罷出候ニも及申間敷様ニ被仰聞候得共、岩手より御申越候儀、又は右之訳ケも在之候ニ付申遣候、且那方之儀、万端御両所様え隨ひ相勤候儀ニ候得共、古橋え申遣候儀も如何奉存候得共、御上御一緒之儀故、不顧思召遣候、左様御心得可被下候、猶期後音之時候、恐惶謹言

五月十八日

所勝右衛門判

一 五月廿二日 隼助(介)殿・勝右衛門殿・六郎右衛門同道御役所罷出、元メ中え出会候處、小熊川舟橋御入用先格之通、帳面ニ仕立差出候様ニ被申聞候、其後青木次郎九郎様御逢、右之通被仰候ニ付、承知仕候段御挨拶申上、何も旅宿え引打寄り、相談之上ニて帳面三冊仕立、翌廿三日朝御役所え持參、元メ中迄差出候處、無故障請取被申候事

一 笠松御役所え差出候帳面三冊左之通

延享四年

尚以岩手え之御返書御別紙被遣之、拙者返事一所ニ仕差遣申候、貴様御心得可被下候、岩手より御連名來状此方留置申候已上

右之通勝右衛門殿より返書、迫間服部次郎右衛門殿より添狀ニて、関迄被差出候ニ付、今十九日昼関より到来、右は返書ニて事済候故不能再報候事
一 五月廿一日 右就御用羽渕六郎右衛門笠松え罷出

羽渕六郎右衛門様

大嶋三郎右衛門様

朝鮮人來朝ニ付濃州小熊川舟橋御入用之覚

竹中左京

大嶋雲八 立合

大嶋雲四郎

川幅式拾式間
一船橋

長式拾式間 幅式間 尾張御領小熊村
小熊川

夕田村・同郡鑄物師屋村、右式ヶ村え割賦之分、此
船九分四厘、合式艘式分八厘從前々如斯

船六艘

御料私領より出ル

右小熊川舟橋場は、尾州御領ニて候得共、從前々竹
中左京・大嶋雲八・大嶋雲四郎方より家來差出橋掛
来候、材木・竹・苧綱等は、享保四亥年も辻甚太郎
様より御入用を以御買上、藤綱等は私領・村方御割
賦被成、右三人之家來え御渡候、船之儀は前々より、
御料並私領方え御預置候ニ付、御料・私領村々より

此舟六艘之儀は、御料鑄物師屋村・同大洞村・同八
幡村・同古橋村・同西方村・同山田村・同板井村・
同下川辺村・同石神村・同上川辺村・同鹿塩村・同
絹丸村・同大山村・瀧田村並松平隼人様御知行所、
池尻村、右村々立合出之

右ニ付御入用之訛

大杭

但長三間より四間迄
未口七寸より九寸迄

八本

あうち木但式間半

さくら木但長式間半
四寸角

五拾六本

敷板但老間板六枚伏幅壹尺
長式間厚サ式寸

百三拾式枚

苧綱但長六拾間宛
七寸廻

武筋

八艘
九艘
式艘七分式厘
式艘式分八厘
御料所より出ル

竹中左京より出ス
大嶋雲八より出ス
大嶋雲四郎より出ス
御料所より出ル

是は雲四郎祖父、雲四郎上ヶ地之分七百五拾四石、
只今御料所ニ罷成候村之分、大野郡古橋村・同郡西
方村・加茂郡鑄物師屋村・同郡迫間村、右四ヶ村え
割賦ニ罷成候分、此舟壹艘三分四厘、大嶋主膳上ヶ
地之分五百石、唯今御料所ニ罷成候村之分、加茂郡

右之外前々より御料・私領百姓役被仰付候分

一人足四千三百式拾人余

舟掛渡人足並道築平均人足垣
結川堀其外諸色労人足垣

一繩百三拾九束八房

但老束拾房結縄繩並
老房壹丈繩五拾尋宛

一白口藤六拾束

但老束拾貫曰 藤綱

右之通享保四年亥之春、御勘定所え辻甚太郎様より

御伺相済、右之品々被成御渡、小熊船橋掛渡シ申候、

此度之儀も橋場之様子、先年ニ相替儀も相見え不申

候間、書面之通御渡被下候様ニ仕度候以上

卯五月

大嶋雲四郎内所勝右衛門印

大嶋雲八内羽瀬六郎右衛門印

竹中左京内大嶋隼介印

狩野藤左衛門殿

赤生斎右衛門殿

右田伴右衛門殿

延享四年

享保四亥年小熊川船橋入用割賦高

卯五月

小熊川船橋入用割賦高

高壹万五千六百四拾四石七斗五升五合

内

高四百五拾六石八斗九升

御料

大洞村

鋳物師屋村之内

是は先年大嶋雲八御預り所之内、今程御料ニ罷

高七百五拾四石
成候

御

古橋村之内

西方村之内

迫間村之内

鋳物師屋村之内

是は先年大嶋雲八御預り所之内、今程御料ニ罷

ニ罷成候

外高千九百弐拾四石七斗六升八合
八幡村之内
御料

西方村之内

古橋村之内

是は先年大嶋雲八御預り所之内、今程御料ニ罷成候、但前々より船橋掛人足出シ候ニ付、割賦

金出シ不申候

高八百六拾五石四斗四合

御

山田村

柄井村

是は先年大嶋雲八御預り所之内、今程御料ニ罷

成候

高三千弐百三拾三石弐斗弐升壹合
御料

上河辺村

下川辺村

石神村

外高千九百式拾四石七斗六升八合 舟橋掛人足高
右之通ニ御座候以上

卯五月

鹿塩村
大山村
瀧田村
絹丸村

是は先年大嶋雲八御預り所之分、今程御料ニ罷成候

高五百石
御料
夕田村

鑄物師屋村之内

是は先年大嶋主膳知行所上ヶ地之分、今程御料ニ罷成候

高三百九拾式石武斗四升

松平隼人知行
池尻村

是は先年大嶋雲八御預り所之分、其後御料ニ罷成、今程松平隼人知行ニ罷成候分

高五千右
竹中左京分

舟橋式拾式間分
一押竹

小熊川船橋入用帳
小熊川船橋入用覺

代銀九匁八分

太サ六寸廻

式拾八本

高弐千九百四拾三石
大嶋雲八分

一釘
長五寸

代銀九匁八分

三百本

高千五百石
右同断

一垢取柄杓

代銀式拾四匁

式拾本

高合巻万五千六百四拾四石七斗五升五合

大嶋雲四郎内
所勝右衛門印
大嶋雲八郎内
羽渕六郎右衛門印
竹中左京内
大野隼介印

狩野藤左衛門殿
赤生斎右衛門殿
右田伴右衛門殿

第一部 記録の部

七五六

代銀三拾壹匁弐分

一大工手当飯米共

代銀百式匁五分

四拾壹人

一屋根取葺

梁行式間
桁行四間半

小熊川
舟橋番所

一高桃燈

式拾六張

一立柱

右入用

一高桃燈台

式拾六本

一桁

代銀三拾四匁七分

長式間二四寸角

拾三本

一三拾目蠟燭

百六拾六挺

一椽

代銀三拾九匁

長式間三寸二四寸角

拾一本

一竹明松

式百挺

一椽かまち

長九尺幅四寸厚式寸

三本

一明キ俵

代銀四拾八匁

一上遣

代銀拾匁

長式間式寸角

拾六本

一代銀六拾匁

四百

一數板

代銀拾匁七分式厘

長壹間幅壹尺厚五分

四拾五枚

一惣矢來竹・杭木・蕨繩細繩共

高六尺
長六拾間

一板持

代銀七匁五分

長式間幅五寸厚壹寸

拾壹挺

一代銀百三拾匁

拾五本

一松丸太いのこ五組

代銀拾五匁

長壹丈

五本

一代銀拾五匁

六拾本

一川堰竹

太サ六寸廻

一百

一横

代銀拾四匁四分

一代銀拾八匁

一川堰明キ俵

一竹垂木

太サ六寸廻

三拾本

代銀拾五匁六分

一葺板

代銀九匁

長壹尺五寸幅三寸
三千八百五拾枚

屋根拾壹坪取葺

一疊

一御番所鎧立並箱番所大工作料飯米共
四拾八人

一ゑつり竹

太サ五寸廻

五拾本

一縁り取

代銀五拾武匁

拾三疊

一屋根押竹

太サ四寸廻

六拾本

一蓆

代銀式拾六匁四分

拾壹枚

一葭簀

長七尺幅壹間

拾八枚

一手桶

代銀三匁三分

拾

一葭簀押竹

太サ四寸廻

拾八本

一水溜桶

代銀式拾五匁

壹

一垂木打付釘

長五寸

百六拾武本

一鎧立

長壹間高六尺

壹

一はりかね

代銀六匁

三百目

代銀八匁四分

壹

一敷板打付釘

長式寸五分

四百五拾本

一鎧立

長壹間高六尺

壹

一藤

拾武把

一葭垣

四拾八間

代銀百式拾匁

但葭・杭・竹・藤・細繩共、番所前後葭垣

メ銀壹貫四百三拾式匁五分三厘

右は享保四亥年朝鮮人來朝ニ付、小熊川御船橋入用
村々え御割賦被下候分、書面之通ニ御座候以上

卯五月

大嶋雲四郎内所勝右衛門
大嶋雲八内所羽渕六郎右衛門
竹中左京内野隼介

狩野藤左衛門殿
赤生斉右衛門殿
右田伴右衛門殿

右之通帳面三冊相認、笠松御役所え三所致持參差出
候処、無故障相納候事

一五月廿一日 羽渕六郎右衛門川辺早朝発足、笠松え
罷出候、供立駕籠にて、若党・道具・挾箱・草履取、
右之通召連罷越候、於笠松宿山懸屋傳兵衛

一岩手大野隼介殿旅宿

一上ノ保所勝右衛門殿旅宿

右三所申合、御用方申談御役所え罷出、御用向廿三
日之昼頃迄ニ相済候ニ付、三所共面々笠松出足申候、
六郎右衛門儀、廿三日之夜半頃川辺え罷帰候事

一七月廿三日 申刻頃古橋村庄屋金右衛門方より書状
到来、文言左之通

一筆啓上仕候、未残暑強御座候得共、其御地貴公様
弥御勇健被遊御座候由之、目出度奉存候、隨て此方
下拙無事罷暮申候

一昨日笠松從御役所、急ニ罷越候様ニ被仰下、則昨
日罷出候得は、船橋入用人足等割賦高之帳、先頃御
上ヶ置被成候、村々銘々ニ高書付差出候様ニ被仰付
候、先御預り所之村々、其許御扣御帳面御書出シ御
越可被下候、尤人足割帳ニテ大概は相知候得共、村々
合勺迄は相知不申候故申遣候、雲四郎様御上ヶ地、
主膳様御上ヶ地は上ノ保え申進候、其許ニテ相知候
ハハ、是又御書付御越可被下候、右之趣共御両所え
申遣候て、帳面相認急ニ差上候様ニ、被仰付候故、
以飛札申上候、恐惶謹言

七月廿三日

棚橋金右衛門

羽渕六郎右衛門様

一右之返状如左之通

御札令披見候、如承意未残暑甚ニ候得共、弥御無異
之由珍重奉存候、然は此間笠松從御役所、急ニ被罷
出候様ニと申来候付、早速参上候處、舟橋入用人足
等割賦高帳先頃差出候、村々銘々高書付、差出候
様ニ被仰渡候、先御預り所之村々、此方扣帳面書出
シ可差遣旨、尤人足割帳ニて大概は相知候得共、村々
合勺迄は不相知候故、御申越候由御紙面之通得其意
申候、則別紙ニ相認遣候間、御請取可被成候、右為
御答如此御座候、恐惶謹言

七月廿四日

羽渕六郎右衛門判

棚橋金右衛門様

先年大嶋雲八御預り所之分上ヶ高書出ス

各務郡

大洞村

高武百石

高千武百五拾六石八斗九升

加茂郡

八幡村

高三百八拾六石武斗五升

西方村之内

高三百五石八斗八升

古橋村之内

高六百七拾壹石壹斗八升四合

武儀郡

高百九拾四石武斗武升

加茂郡

高六百四拾五石八斗七升

同上郡

高五百壹石三斗

川辺村

高五百八拾五石九斗

下川辺村

高百五十石三斗

石郡

高式百武拾三石八斗六升

鹿郡

高四百三拾九石壹斗武升三合

大郡

高五百三拾六石五斗六升八合

瀧郡

高百五十石三斗

丸村

高三百九拾壹石壹斗八升

尻村

右拾六ヶ村高合六千八百七拾六石壹斗四升九合

山田村

以上

山村

七月廿四日

羽渕六郎右衛門

棚橋金右衛門殿

武儀郡

右之通相認差遣候事

絹郡

一九月十六日 上ノ保所勝右衛門殿より書状闕より到

来、文言左之通

一筆致啓上候、段々冷氣罷成候得共、弥御堅勝可被成御勤珍重奉存候、然は此間古橋村庄屋金右衛門方より、手紙差越申候処、小熊川舟橋御用ニ付笠松え罷出候由、則金右衛門方より之手紙、並返書下書共懸御目ニ申候、被成御覽御返シ可被下候、間數減候て申上候儀如何ニ候得共、岩手ニて得心之儀ニ御座候得は、其通之儀ニ奉存候、夫共思召も御座候ハハ、被仰聞被下候様ニと奉存候、猶期後暮之節候、恐惶謹言

九月十五日

所勝右衛門判

羽瀬六郎右衛門様

尚以差て急成儀ニも無之候故、関小嶋氏より御便次第、早々御届被下候様ニと御頼申候以上
一右返事之文言左之通

貴札致拝見候、如仰冷氣罷成候得共、弥御堅固被成

御勤珍重奉存候、然は此間古橋村庄屋金右衛門方より、其許様え手紙を以申遣候由、小熊川舟橋就御用ニ笠松え罷出候段、則金右衛門方より之手紙、並貴

様より之御返書御下書共、御見セ被成一覽仕候、兼て何も申合書付差上置候船橋間数、先格之通式拾式間と有之候処、笠松役人衆被申候は、左程之間數ニ相見え不申候間、間數減シ候て可然様ニ被存候由、金右衛門え内談有之候処、拾八間ニ相減シ、先年も左之通ニて掛け方相済候由、有軀ニ申上候間、岩手えも金右衛門罷越其段可申入之由、其許様えも致御通達候て、此表えも被仰達被下候様ニ申越候之段、委細御紙面之趣致承知候、如仰間數相減候ては、如何ニ思召候得共、岩手ニて得心之儀ニ御座候ハハ、其通り之儀と思召候由、此方とても外ニ存念も無御座候、御吟味之筋ニ相成候ては、有軀ニ仕候方可然哉、先年とハ振り合之違ひ候儀も、可有御座と存候、大概之儀は從此方は遠方ニ候之間、御差心得宜様ニ御濟シ被遣、追て被仰聞可被下候万端奉頼候、右為御答如斯御座候、恐惶謹言

九月十六日

羽瀬六郎右衛門判

所勝右衛門様

尚以金右衛門方より之手紙並御返書下書共、返遣仕

候間御落手可被下候、右之儀御差急キ不被成候義之故、関小嶋甚助方迄被遣候由、重てとても不差急儀は、関迄御出シ可被下候、万々重可得御意候以上

一十二月五日 笠松從御役所書状闕より到来、文言左之通

一筆致啓上候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御用之繩、濃州御知行所え可掛分、如古例致割賦、次郎九郎方より別紙書付致進達候間、右繩日限之通無遲滯橋場え御届可被成候、右之趣各様迄可申遣旨、次郎九郎申ニ付如斯御座候、恐惶謹言

十一月廿七日

西村佐七判
村上郡八判
佐藤丈太夫判

大嶋雲八様

御役人中様

高武千八百五拾六石九斗九升或合六勺
一繩九束四把

但壹把壹丈尋五拾繩太サ壹寸三分廻

但古例より之寸法如此

右は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御用之繩、

如古例割賦書面之通ニ候、来辰正月廿日より廿八日迄之内、小熊川船橋場え御届、竹中左京殿・大嶋雲八殿・大嶋雲四郎殿、家來え御渡可被成候、先年も右繩請負ニ御申付候方も有之、繩惡敷請取之節致迷惑候由ニ候間、被入御念繩壹把壹丈、尋五拾繩、太サ壹寸三分廻り、少も無相違様被成可被遣候以上卯十一月

大嶋雲八殿

青木次郎九郎印

一十二月六日 笠松御役所え之返書文言左之通

先月廿七日之貴札相達致拝見候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御用之繩、濃州知行所え可掛分如古例被成御割賦、從次郎九郎様御別紙御判物壹通、被遣之奉請取候、右繩日限之通無遲滯、橋場え相届可申候由、右之通拙者共迄可被仰遣之旨、次郎九郎様被仰付候、御下知之趣承知仕候、右為御請如斯御座候、恐惶謹言

十二月六日

大嶋三郎右衛門判

羽渕六郎右衛門判

佐藤丈太夫様

村上郡八様

西村佐七様

右之通相認関より笠松御役所え差出候事

一十二月五日 上ノ保所勝右衛門殿より書状関より到

来、文言左之通

一筆致啓上候、寒氣強罷成候得共、弥御堅勝可被成
御勤珍重奉存候、然は大野孫左衛門殿より、只今御
連名書状到来、致内見為持進上仕候、笠松え之返書
ニ拙者判形も仕進候、段々延引ニも罷成候間、笠松
え夫より御届被成候様ニ致度奉存候、且亦岩手え之
返事は從是相届可申候間、御報御認迫間村迄被遣候
様ニと奉存候、右為可得其意如此御座候、恐惶謹言
十二月四日

所勝右衛門判

羽渕六郎右衛門様

覚

一 笠松元メ中より之一封

内ニ繩藤之御書付入

一 笠松え之返書

一 左京様え被遣候御書付

一大野孫左衛門殿より之一封

右之通進上仕候間、御請取可被下候已上

十二月四日

所勝右衛門

羽渕六郎右衛門様

一十二月五日 岩手大野孫左衛門殿より之書状從上ノ
保到来、文言左之通

一筆致啓上候、其後は久々不得御意御疎遠ニ御座候、
寒氣御座候得共、各様弥御堅固可被成御勤と珍重奉
存候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御入
用之繩藤、如古例被成御差出候、御方様え青木次郎
九郎様より被成御触、正月廿日より同廿八日迄、小
熊橋場え無相違御届、御両所様御家來並此方家來、
其節出合請取可申旨、御両所様並左京御連名之御書
付被遣、左様可相心得旨申來候、内見仕則順達申候、
可被成御一覽候、元メ衆より之來状も進申候間、可
被成御一覽候、御報之儀は乍慮外相認判形仕差進候
間、被成御覽宜思召候ハハ、被成御判形、從其許直
ニ笠松え御遣可被下候奉頼候、右為可得御意如斯御

座候、恐惶謹言

十二月二日

大野孫左衛門判隼介事

小熊川船橋御用藤繩割賦

遠山七之丞

松平能登守

羽渕六郎右衛門様

高六千五百三拾武石四斗五升三合
一繩式拾壹束六把

大嶋雲八

高武千八百五拾六石九斗五升九合武勺九才
一繩八拾壹束六把

笠松從元メ衆之書状文言左之通

高五千石
一繩拾六束五把

竹中左京

一筆致啓上候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川

高三千四百四拾六石八合
一繩拾壹束四把

大嶋雲四郎

舟橋御用之繩白口藤、如古例致割賦、來辰正月廿日

高壹万武拾壹石五斗武升
一白口藤拾五馱

松平隼人

より同廿八日迄之内、右場所え御届被成様ニ次郎九

高四万四千七拾武石四斗壹升武合八勺九才
一合繩百四拾五束五把
高壹万武拾壹石五斗武升

遠山佐渡守

郎方より申達候ニ付、別紙書付之通御心得可被成候、

但壹丈尋五拾繩壹把之
積太サ壹寸三分廻

青木次郎九郎印

右之段各様迄申進候様ニ、次郎九郎申ニ付如斯御座

合白口藤拾五馱
但壹馱ニ付四拾貫目

候、恐惶謹言

十一月廿七日

西村佐七判

高一千五百石
一繩五百束

竹中左京

村上郡八判

高壹万武拾壹石五斗武升
一合繩百四拾五束五把

大嶋雲四郎

佐藤丈太夫判

高壹万武拾壹石五斗武升
一合白口藤拾五馱

青木次郎九郎印

竹中左京様

高三千四百四拾六石八合
一繩拾六束五把

竹中左京

大嶋雲八様

高一千五百石
一繩五百束

大嶋雲八

大嶋雲四郎様

高一千五百石
一繩五百束

大嶋雲四郎

御役人中様

高一千五百石
一繩五百束

大嶋雲四郎

右本書は岩手ニ相納り有之事

一 笠松元メ衆え三所より之返書文言左之通

先月廿七日之貴札致拝見候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御用之繩白口藤、如古賦、來辰正月廿日より同廿八日迄之内、右場所え相届候様ニ從次郎九郎様被仰達候旨ニて、左京・雲八・雲四郎方え連名之御別紙御書付被遣、為御意被仰下候趣奉畏候、右御請為可申上如斯御座候、恐惶謹言

十二月六日

所勝右衛門判

羽渕六郎右衛門判

大野孫左衛門判

佐藤丈太夫様

村上郡八様

西村佐七様

右之通岩手ニて相認上ノ保迄到来、夫より川辺え相達候ニ付判形何も相調申候、依之関より笠松え差出候事

一 岩手え之返状文言左之通

貴札致拝見候、如仰其後は久々不得御意、寒氣強罷成候得共、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は来辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川舟橋御入用之繩藤、如古例御差出被成候、御方様え來正月廿日より同廿八日迄、小熊橋場え無相違御届ケ候様ニ、青木次郎九郎様より被成御触候間、其方様御家來並此方両所家來、其節出合請取可申之旨、左京様・雲八・雲四郎御連名之御書付被遣候ニ付、被成御内見御順達拝見仕候、笠松元メ衆より之來状も被遣、御報之儀は其許様ニて、御認御判被成被遣候間、拙者共も判形仕、則笠松え為持差遣候間、左様御心得可被下候、右為御答如此御座候、恐惶謹言

十二月六日

所勝右衛門判

羽渕六郎右衛門判

大野孫左衛門様

尚以左京様え被遣候小熊御用繩之儀も、為御念御書付御見セ被成候由、一覽仕致返遣候、御落手可被下候已上

右之通相認上ノ保迄遣之候事

一 上ノ保え之返書文言左之通

貴札致拝見候、如仰寒氣甚ニ罷成候処、弥御堅固被

成御勤候由珍重奉存候、然は大野孫左衛門殿より御

連名之書状致到来候ニ付、御内見被成被遣候由、昨

晩関より相達落手仕候、笠松え之返書御判形被成被

遣候、延引ニも罷成候間、笠松え此方より直ニ相届

候様ニ、可仕之旨致承知候、岩手え之返書相認進申

候間、思召も無御座候ハハ、御判形被成御届ケ可被

下候、尤迫間迄差遣申候儀ニ御座候、右為御答如斯

御座候、恐惶謹言

十二月六日

羽渕六郎右衛門判

所勝右衛門様

尚以御別紙拝見何も請取一覽仕候已上

覚

一 笠松より来候繩藤之御書付壹通

一 左京様え被遣候御書付

一大野孫左衛門殿え之返書壹通

右之通進上申候間、御請取被遣可被下候已上

十二月六日

羽渕六郎右衛門

所勝右衛門様

一 十二月七日 従笠松御役所來り候藁繩御書付一通

右之通笠松御郡代所より御触書被差遣候、委細之儀
は御書付之写遣候、被得其意御用繩、隨分入念之御
知行所え申付、来辰正月廿日より廿八日迄之内、小
熊川船橋場え如先例、宰領ヲ付差出候様ニ可申付候、
右繩割賦之儀左之通可被申渡候

一 繩式束七把

中之番村より可差出分

但壹把壹丈ひろ 五拾たぐり ふとさ 壱寸三分廻

一 繩壹束四把

柄井村より可差出分

右同断

一 繩五束三把

関郷より可差出分

右同断

右之通ニ可被相心得候以上

卯十二月

大嶋三郎右衛門印

羽渕六郎右衛門印

吉田金左衛門殿

佐藤太次右衛門殿

小嶋甚助殿

一十二月十日 岩手上ノ保より之書状閥より到来、文言左之通

一筆致啓上候、甚寒氣之節御座候得共、各様弥御堅固可被成御勤珍重奉存候、然は此間古橋村庄屋金左衛門召呼、來年朝鮮人來朝ニ付、小熊川舟橋取懸り之儀、笠松表承合各様御出會も致度旨相談申候処、笠松表え罷越聞合候処、來ル十二・三日頃小熊村え罷越、可然之旨昨日申越候、日限之儀、兼て此方より相定可申進旨約諾ニ付、來ル十三日小熊村え乍御太儀可被成御越候、拙者儀も此十三日、小熊村え早天出宅可被成御越候間、左様御心得可被成候、笠松衆も西結村え十二・三日頃被參、小熊村ニテ出合可申由ニ候間、左様ニ御心得可被成候、為念金右衛門方より差越候書状懸御目候、河邊え早々被仰遣十三日御出會可仕候、右之段為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十二月九日

大野孫左衛門判

十二月九日

所勝右衛門判

羽渕六郎右衛門様

尚以小熊村御宿之儀、先達て金右衛門より可申遣旨申越候間、貴様御心得可被成候以上
一筆致啓上候、然は大野孫左衛門殿より之御連名書状、昨日從古橋村相達致内見候処、來ル十三日小熊村ニテ御出會可致之旨申来候、仍私儀弥十三日可罷出候、貴様ニも定て御出可被成奉存候、心事於小熊村可得御意候、恐惶謹言

尚以御出會之儀ニ候間、少も早々御知らせ申度、閑迄直ニ為持遣候、且亦孫左衛門殿え之反事は、余日無之儀如何可被成候哉、思召次第可被成候以上
一古橋村金右衛門方より書状、上ノ保より到来文言如左

幸便ニ付以書札申上候、其以後は御物遠ニ罷過候、
弥御堅勝被遊御座候哉と、日出度奉存候、下拙共無事ニ罷在候、然は此間岩手え御用之由ニ付、拙者ニ罷越候様ニ被仰聞候故、以參得御意申候処、冬中御立会之儀、如何可被成哉と御相談ニ付、拙者笠松え

所勝右衛門様

羽渕六郎右衛門様

罷越承合候処ニ、笠松御役人中十二・三日頃ニ西結
村え御出、舟橋諸規式御相談之御究メ被成筈ニ御座
候故、小熊船橋之儀も何も様御立会場所等御見分、
諸色共有増御相談御極メ被成候て、可然様ニ笠松衆
被仰候ニ付岩手え申進候、則今十三日御出会可被成
様ニ被仰聞候、乍御太儀十三日小熊村え御越可被遊
候、委細は御出会之節可得御意候

一此間橋舟之儀、先年より預り村々え御廻文出候処、
武芸郡池尻村之義、古来より船出シ來り不申候由、
(儀)御役所え申出候ニ付、拙者え御吟味御座候、是は從
古來慥ニ出申來り候様ニ申上候、然共其許様より
前々より出シ來り候段、御書付取り出シ候様被仰候
間、此度書類御吟味被成、舟預り之判物等御座候は、
御持參被遊可被下候、其外舟橋掛り割合諸帳面等、
不殘御持參被遊可被下候、此度此方より飛脚進上可
仕候処、御連状故上ノ保え御頼申進候以上

十一月九日

羽渕六郎右衛門様

棚橋金右衛門

一大野孫左衛門殿より御連名之書状壹封
一棚橋金右衛門方より之壹封

一大野孫左衛門殿より御連名之書状壹封
一大野氏え金右衛門方より遣候壹封

右之通致遣上候以上

十二月十日

所勝右衛門

羽渕六郎右衛門様

右之通何も一所関より到来申候、來ル十三日小熊村
え罷出候ニ付不及返事候事

一十二月十二日 大嶋三郎右衛門川辺発足、加納ニ致
一宿翌十三日四ツ時小熊村え罷出ル、旅宿武山利右
衛門方え着、供廻り若党老人・草履取・道具・挾箱
一 岩手大野孫左衛門殿、上ノ保所勝右衛門殿ニも追々
着ニテ、何も暫ク休息之上互ニ旅宿え罷越、三郎右
衛門儀初て出会申候、古橋村庄屋金右衛門・円六義
も申合之通罷出候事

一十二月十三日 夕方右何も立合、小熊境川船橋場致

見分候事、利右衛門預り御藏並鍵碇等見分相改候事
一十二月十四日 孫左衛門殿旅宿え何も寄合、來正月
繩納請取方承合、並繩小屋等しつらい之儀、其外御

覚

用方彼是申談置候事

一 御藏預り利右衛門、御藏敷地代被下候様ニ、金右衛門を以相頼候付、三所帳面等相改候處、前々より被下り候間、先格之通金壹両被下候筈、申談相渡シ候、右請取証文左之通

覚

一 金壹両也

右は此度御三所様方御參会被遊候ニ付、御藏敷地代被下置、慥ニ請取難有奉存候以上

延享四年卯十二月十四日

西小熊村
利右衛門印

大野孫左衛門様

大嶋三郎右衛門様
所勝右衛門様

右之通三所より金子相渡ス、本書ハ岩手ニ納有之候

事、但先格之通致高割候事

一十二月十五日 朝鮮人御用掛り之内、笠松手代衆狩野藤左衛門・右田伴右衛門、須賀御林より西結仮り御役所え参被申候付、乍序小熊川舟橋場見分、三所立合申度段、先達て金右衛門を以被申聞、其心得ニ

罷在候処、四ツ半頃船橋場え被罷越候ニ付、三所同道罷出候処、藤左衛門被申聞候は、舟橋掛方之儀、船數先年より相減シ御懸渡被成候哉、左候得は拙者より御渡申候、橋板等も減シ候様ニ可致候、いつれニも近々御書付を被成、拙者共迄被差出候様ニと被申候、同夜三所答候は、小熊川之儀折々致出水候事ニ候得は難相減候、兎角享保年之通ニ御目論見可被下候、左候得は書付ニ及間舗と存候段申候処、然共為念候間御差出候様ニ、仕度と被申候ニ付、最早年内無余日、近頃自由ケ間敷儀ニ御座候得共、少も早く罷帰り度候間、右書付指出候義暫ク延引仕度候、追付來三月罷出候間其節可差出段、孫左衛門殿被申達候、又藤左衛門被申候は、此節御主用多之段御尤ニ存候得共、於笠松表ニ板・材木請負之者え申付候間、何卒今度被差出候様ニ被申候、然ル處伴右衛門被申候は、享保年中之通御掛渡之御積り御座候由、先刻被仰聞候間其心得を以請負え可申付候、御書付之儀暫ク御延引被成、可然之由被申候得は、藤左衛門ニも其挨拶ニテ相済候事、尤三所旅宿之内え右手代衆立寄り、何角と対談可致杯被申間敷ものニも無

之候間、左様候節は藏預りニも候間、三郎右衛門旅宿利右衛門宅え、同道寄り合可申筈、示合置吸物附食酒等、出可申手合ニ致置候処、御用向右之外御申可談儀も無之差急キ候間、自是直ニ罷帰り候段、被申聞歸被申候事

一 同日先達て金右衛門より川辺え申越候、池尻村船割賦之儀差出不申由ニ付、帳面等相改候処前々より指^シ出候、殊更川辺表ニ差出候帳面、池尻村莊屋判物等有之ニ付、小熊え罷出候節、金右衛門え其段申聞、帳面等見セ申候處、慥成御事御座候、然共其段御書付被成、右手代衆え御差出候様ニ御頼可申旨、藤左衛門殿被申候間、左様可被成旨金右衛門申ニ付、三所相談之上書付相認置、今日右手代衆立合之節差出候處、無故障請取被申候事

一 右書付左之通

覚

一 池尻村より船割賦差出不申旨申出候ニ付、拙者共え御尋被仰聞致承知之候、帳面等相改候処、前々より差出申儀ニ御座候

一 舟四分七厘五毛

池尻村

但船六艘之割賦
右之通前々より割賦銀差出、則印形物等有之、相違無御座候以上
卯十一月十五日

大嶋雲八郎内所勝右衛門
大嶋雲八郎内所勝右衛門
竹中左京内大野孫左衛門

狩野藤左衛門殿

赤生斎右衛門殿

右田伴右衛門殿

一 今度三所立合舟橋場見分之節、繩張り人足鍵積替、
藏敷地代等入用左之通

覚

一 金壺兩

此錢五貫百文

鍵積替敷木代

一 錢八拾五文

一 同拾五文

一 同八拾五文

一 同五拾壹文

繩張り人足代
鍵碇形付人足代
繩張り人足代

一同式百文

酒代但笠松手代衆
立寄り用意

一同百九拾五文

肴代入用

五貫七百三拾壹文

小熊村利右衛門

内

錢三貫三拾五文

岩手

同壹貫七百八拾六文

川辺

同九百拾文

上ノ保

右は高割ニテ利右衛門え払、別紙請取書之事

一同日右御用相済候ニ付三所申合、昼過より出立罷帰

三郎右衛門加納ニ一宿、翌十六日川辺え罷帰候事

一十二月十八日 岩手・上保え差遣候書状文言左之通

一筆致啓上候、嚴寒之節各様弥御堅固ニ可被成御勤

仕珍重奉存候、先以此間は初て緩々得御意大慶奉存

候、定て夜ニ入可被成御帰着、孫左衛門殿ニは別て

遅ク御着と察入候、寒氣之節御太儀千万奉存候、私

儀加納一宿、翌日ハ雪ニテ難儀仕候得共、無恙罷帰

り申候

一来春御参会之節、舟橋掛渡シニ付、笠松え差出シ候

帳面之儀、帰り之節途中ニテ相考候処、孫左衛門殿

被仰候通逆ニテ、三所より差出申儀ニ無御座候様ニ

被存候、正月廿日より御出会之節及御相談、御指出不被成候様ニ可仕欵と奉存候、各様ニハ如何思召候哉、弥差出シ不申方御尤ニ思召候ハハ、金右衛門冬之内、御両所之内え被成御呼逆候段、旁被仰含笠松え罷越、宜申達候様ニも被成間敷候哉、又は夫ニも及不申、帳面御差出被成候様ニも思召候ハハ、正月

御参会之節、致御相談候様ニも可仕候、若又差出シ

不申方可然思召候ハハ、冬ニ之内笠松え被仰達置候方、

可然哉と奉存候、狩野藤左衛門殿殊之外入念之趣ニ

候得は、万一了簡替帳面差出シ可申杯、有之間敷物

ニモ無御座候間、為念得御意置候、いつれニも思召

次第三可被成候、外ニ相堅儀無御座候得共、右心得

之段得御意度如此御座候、猶期來陽可得貴意候、恐

惶謹言

十二月十八日

大嶋三郎右衛門判

大野孫左衛門様

所勝右衛門様

尚以右差急キ儀ニも無御座候間、関え向幸便ニ差遣候間速ク相達可申候、本冬之儀ハ為念得御意申候間、

貴報濟御無用可被下候、將亦私儀來春よりも罷出候
答ニ御座候間、万々其節可得貴意候以上

相對候様、被仰聞候様ニと奉存候以上
覺

右之書状闕え遣之、上ノ保迄相達候様ニ申遣候事
一十二月廿一日 朝笠松従元メ衆之書状飛脚ニて到
來、文言左之通

小熊川舟橋諸色人足御割賦御書付壹通、並御添簡壹
通致落手候、追て御報可仕候、為念請取書を以如此
御座候以上

舟橋諸入用人足、如古例高割を以大積別紙之通御座
候間、人足無滞差出候様ニ、御知行所村々え御触可
被成候、右之段申進候様ニ、次郎九郎申ニ付如斯御
座候、恐惶謹言

十二月十九日

羽渕六郎右衛門

佐藤丈太夫様
村上郡八様
西村佐七様

十二月十九日

西村佐七判

村上郡八判

佐藤丈太夫判

大嶋雲八様

御役人中様

追て遠方村々は、人足村方より差出候儀不勝手ニ付、
其所ニテ相雇度旨申候ハハ、賃錢百文宛ニテ請合、
無滯人足差出候様、古橋村庄屋共ニ申付置候間、若
右躰之村も在之候ハハ、勝手次第古橋村庄屋共ニ致

小熊川舟橋諸色人足大積割賦覚

青木次郎九郎

支配所

幸田善太夫様

御代官所

一役高千八百五拾石九斗壹升四合
此人足四百五拾四人半

一役高四千五百武拾武石七斗四升武合
此人足千百拾壹人

多羅尾四郎右

衛門様御代官

一役高千武百三拾武石六斗三升八合
此人足三百三人

所

一役高百四拾武石七斗五升九合

金田菜女様御

此人足三拾五人

知行所

一役高三百九拾七石武斗四升

松平隼人様御

此人足九拾七人半

知行所

一役高八百五拾六石九斗九升武合六勺

大嶋雲八様御

此人足七百武人

知行所

一役高五千石

竹中左京様御

此人足千武百武拾八人半

知行所

此人足三百六拾八人半

大嶋雲四郎様

役高合壹万七千五百三石武斗八升五合六勺

御知行所

此人足四千三百人

但高百石二付
人足武拾四人半

右之通小熊川舟橋懸渡人足、大積割賦書面之通御座候、
御知行所村々え御触可被成候以上

卯十二月

佐藤丈太夫様
村上郡八様
西村佐七様

羽瀬六郎右衛門
大嶋三郎右衛門

青木次郎九郎内
西村佐七印
村上郡八印
佐藤丈太夫印

大嶋雲八様

御役人中

笠松元メ衆え之右返書文言左之通

一十二月廿二日 夜岩手大野孫左衛門殿、上ノ保所勝
右衛門殿より之書状等、関より到来文言左之通

去ル十九日之貴札致拝見候、然は来辰年朝鮮人來朝
ニ付、小熊川舟橋諸入用人足、如古例高割を以大積、
御別紙之通御座候間人足無滞差出候様ニ、知行所
村々え相触可申旨、右之段被仰越候様ニ次郎九郎様
被仰付候由、御紙面之趣奉得其意候、御別紙相請取
則知行所え相触候儀ニ、右御答早速可得御意之処、
御使之者差急キ候付、其節は請取書差遣申候、依之
御答延引仕候、恐惶謹言

十二月廿三日

一筆致啓上候、然は來辰年朝鮮人來朝ニ付、小熊川舟橋諸入用以高割大積御割賦被成候、御写一帳被遣之、笠松元メ中より被相達候ニ付、為持進候被成御覽候ハハ御返可被下候、且亦左京知行所之儀も別紙書付來候、定て御両所様ニも御同事之事と奉存候、右相認被差越候書面二人足之儀、其所之人足賃錢百文宛ニテ相雇可申義は、勝手次第三可申付旨、古橋村莊屋共え被仰付候由も申来候、是又御同様可申參と奉存候、人足御割賦帳一冊、並元メ中より之書状差遣候間、可被成御覽候、元メ中え返答乍慮外相認遣候間、御覽之上被成御判形、笠松え直ニ為持被遣可被下候

右之段為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

十二月廿一日

大野孫左衛門判

所勝右衛門様

大嶋三郎右衛門様

尚以各樣弥御堅固可被成御勤珍重奉存候以上

一筆致啓上候、此間は小熊村ニテ緩々得御意致大慶候、御用向も無滞相濟御同慶之御事御座候、三郎右

衛門殿ニは初て御越御太儀奉存候、然は右之節小熊川於橋場、笠松御手代中御立合候節被仰聞候も、來春御出会之砌、書付可差進旨挨拶申候処、被聞届其通可致由ニ候処、御目論見御急ニ付、冬中可差出旨金右衛門え御申聞候由ニテ、則其旨申越候、金右衛門より内意下書等も差越相認、印形仕差進候間、御覽之上宣候ハハ、直ニ其元より金右衛門え御渡し被遣候様ニと奉存候、文言思召寄りも御座候ハハ、御認直シ可被下候、自是金右衛門え可差遣候間、無遠慮可被仰聞候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十二月十九日

大野孫左衛門判

大嶋三郎右衛門様
所勝右衛門様

尚以為念金右衛門より差越候、來札並下書入御覽申

候已上

去ル十八日之貴札翌十九日相達致拝見候、甚寒之節弥御堅勝被御勤珍重奉存候、誠先頃は始て得貴意、御懇意共恭致大慶候、御歸ニは雪ニテ御難儀被成候由、御疇申上候事御座候、併御無難御帰候由珍重奉

存候、且拙者も此間迫間村ニ罷在候、右貴札迫間ニ

て致拝見候、昨日罷帰候儀故、為差急御用ニも無之

候故、持參今日岩手え可差遣と奉存候処、昨日御両

守え岩手之來状、古橋村金右衛門方より書状差添、

為持指越申候間内見為持進上仕候、其表より被仰下

候舟橋懸渡申ニ付、笠松え差出候書付之儀ニ御座候

一被仰聞候趣御尤ニは奉存候得共、岩手より書付印形

等も認參候儀、此通り被成候ても可然哉と奉存候、

依之思召如何に候得共、右貴札拙者拝見仕、孫左衛

門殿えは差遣不申候、右得御意候通思召難斗候得共、

大方之儀は岩手え御隨ひ被成候趣ニ相考、勿論此方

之義は、御両所様次第ニ奉存候儀故、右之通私方ニ

御状留置申候、左様御心得可被下候、右貴報旁如此

御座候、恐惶謹言

十二月廿二日

大嶋三郎右衛門様

所勝右衛門判

十二月廿日
上

棚橋金右衛門判

尚以笠松え被差出候書付、並返事ニ判形仕致進上候、
御請可被下候、且来春より彼地え貴様御出被成候由、

乍御太儀珍重奉存候、無程緩々可得貴意、大慶奉存

候以上

追て棚橋金右衛門方より御連名ニ申越候書状懸御目
申候、弥御世話ニ候共、其表より笠松え為持被遣可
被下候已上

一古橋村棚橋金右衛門方より書状文言左之通

從岩手御状箱被遣候故為持進申候、弥御堅勝被遊、
御座候事と恐悦奉存候、然は先日は小熊村え被遊御
出会、緩々得御意大悦奉存候、殊ニ御用向無差支相
濟、御内意大慶奉存候、其後笠松え罷越候処、先日
御立会ニテ被仰談候御書付、冬中ニ御三所より差出
シ被遊候様ニ、被仰渡候ニ付、大野孫左衛門様え御
案内申遣候、則御書付相廻り申候間、御連印御済シ
被遊、(川)辺より笠松町宿傳兵衛方迄御届させ可被
下候、尤拙者宛名ニ被遊被遣可被下候、此方より傳
兵衛方えは引合置可申候、何事も来陽可得貴意候以

所勝右衛門様
大嶋三郎右衛門様

覚

一 笠松元メ中より之状箇壱ツ

内

帳面 一冊

書状 一通

右返事 一通

一大野孫左衛門殿より状箱式ツ

内

御一名状 一通

御連名状 一通

急用と在之候方

笠松え差出候書付 一通

御連名状添

孫左衛門殿え棚橋金右衛門方より之一封入

右之通御届申候以上

十二月廿二日

所勝右衛門門

大嶋三郎右衛門様

右之書面共不残一所ニ、関より十二月廿二日之夜到

来申候、返事之儀は左之通

七 朝鮮通信使來朝記録

一 笠松元メ中え之返事左之通

去ル十九日之貴札致拝見候、然は小熊川船橋諸入用
人足大積、村々え被成御触候ニ付、為心得右御写帳
一冊被成御差越請取申候、尤人足多相掛り候てハ、
村々難儀罷成候間、隨分相減候様可申付旨、右之段
次郎九郎様依仰、御紙面之趣得其意奉存候、恐惶謹

言

十二月廿三日

所勝右衛門判

大嶋三郎右衛門判

大野孫左衛門判

佐藤丈太夫様

村上郡八様

西村佐七様

右之通相認關より笠松え為持差遣之候事、但右之返
書岩手ニテ相認判形遂、上ノ保え來判形済此方え來
ル、笠松より之來狀は岩手ニ納有之事

一 笠松え差出候書付壱通岩手ニテ相認、印形相調從夫

上ノ保え來印形相濟、川辺え到来文言左之通

覚

七七五

小熊川船橋掛方之儀、長式拾式間と先達て書面ニ書
上候處、今度場所相改候得は、尤拾八間程も相掛け
申候、然共御用先ニテ出水仕候得は、橋両脇水湛候
故、橋長延シ不申候ては、罷成間舗候様ニ奉存候間、
式拾式間之御目論見ニ被仰付可被下候以上

卯十二月

大嶋雲四郎内所勝右衛門印
大嶋雲八内所大嶋三郎右衛門印
竹中左京内所大野孫左衛門印

一役高五千石

竹中左京様御
知行所

一役高式千八百五拾六石九斗九升六勺

大嶋雲八様御
知行所

一役高千五百石

大嶋雲四郎様
御知行所

一役高三百九拾七石武斗四升

松平隼人様御
知行所

右之書付一封棚橋金右衛門方迄書状差添、笠松町宿
山懸屋傳兵衛方迄宛名ニ致、関より十二月廿三日為
持差遣之候事

延享四年

小熊川船橋諸色人足大積割賦帳

卯十二月

小熊川船橋諸色人足大積割賦帳

一役高千八百五拾石九斗壹升四合

青木次郎九郎

高式百五拾六石八斗九升
一人足六拾三人

青木次郎九郎支配所
各務郡大洞村

此割賦
此人足四千三百人 但高百石二付
人足式拾四人半

役高合壹万七千五百三石武斗八升五合六勺

知行所
金田菜女様御

一役高四千五百式拾式石七斗四升式合
幸田善太夫様
御代官所

多羅尾四郎右
衛門様御代官
支配所

竹中左京様御知行所
一高五千石人足千式百式拾八人半
一千五百石人足三百六拾八人半
大嶋雲四郎様御知行所
村々
右之通小熊川舟橋懸渡人足大積、割賦書面之通御座
候、為御心得写差進申候、御料、私領共三村々え懸
り人足大分三罷成候儀、御吟味強御座候間、右人足
隨分相減候様、御心得可被成候以上

青木次郎九郎内

郎九郎内
西村

佐七印

佐藤丈太夫判
木山一君ノ曰

竹中左京様

御役人中

右之帳面從笠松御三所え來、岩手より上ノ保え廻り、夫より川辺え到来、右帳面写之本帳は岩手え差戻候

三

一 人足之御触書、從笠松到来之御書付三致奥書、關鄉・
川辺村・栃井村、十二月廿四日相触申候左之通

笠松御郡代所より御書付壹通

覺

吉田金左衛門殿

佐藤太次右衛門殿

小嶋甚助殿

一 来辰年朝鮮人来朝ニ付、小熊川舟橋諸色人足割賦之儀、笠松從御郡代所申來候、則別紙書面之通ニ候間、被得其意、左之通人足無滯差出候様ニ、御知行所え

御申渡可有之候

役高八百四拾七石九斗四升五合

一人足式百八人半

役高四百九石四升七合六勺

一人足百人半

役高平六百石

一人足三百九拾三人

川辺中番村分

板井村分

関郷分

役高合式千八百五拾六石九斗九升式合六勺

メ七百式人

一 遠方人足指出候儀不勝手ニ付、其所ニて相雇度旨申村も有之候ハハ、賃錢百文宛ニて請負無滯、人足差出候様ニ、古橋村庄屋共え從笠松、申付置候由申來候間、右躰之村も在之候ハハ、勝手次第古橋村庄屋共え、致相対候様ニ可罷申聞候

右之通可被相触候以上

卯十二月

大嶋三郎右衛門印
羽渕六郎右衛門印

一小熊川舟橋諸入用人足割賦帳写一冊、笠松元メ衆より被指越候ニ付、為持被遣致一覽候、尤写取り致返遣候、右元メ中え之返書御認被遣、則致判形是又一所ニ笠松え差遣申候、被入御念被仰聞之趣、得其意奉存候、両所えも其表同様、笠松より申來候義ニ御

一 岩手上ノ保え之返書文言左之通
去ル十九日・同廿一日兩度之貴札相達致拝見候、先以嚴寒御座候得共、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、如仰先日は於小熊村緩々得御意、御用向も無滯相済御同意致大慶候、然は右之節、笠松手代衆被申聞候書付之儀、冬中指出可申由ニテ、則御認被成御印形被遣、委曲御紙面之趣致承知之御尤ニ奉存候、兩人共ニ印形相調、川辺表より古橋村金右衛門名宛ニ致、笠松町宿山懸屋傳兵衛方迄差遣申儀御座候、左様御心得可被成候、

一小熊川舟橋諸入用人足割賦帳写一冊、笠松元メ衆より被指越候ニ付、為持被遣致一覽候、尤写取り致返遣候、右元メ中え之返書御認被遣、則致判形是又一所ニ笠松え差遣申候、被入御念被仰聞之趣、得其意奉存候、両所えも其表同様、笠松より申來候義ニ御

座候

右元ノ中より之來状、並古橋村金右衛門より之書状
共致返遣候、右御報旁為可得御意如斯御座候、恐惶
謹言

被成御封岩手え被遣可被下候、右貴報旁如此御座候、
恐惶謹言

十二月廿四日

大嶋三郎右衛門判

十二月廿四日

所勝右衛門様

所勝右衛門判
大嶋三郎右衛門判

尚以御端書之趣致承知、入御念儀ニ奉存候、心緒來
陽可得貴意候以上

右之通相認、上ノ保勝右衛門殿方迄差遣候事
乍御報去ル廿二日之貴札、夜ニ入從関相達致拝見候、
嚴寒ニ御座候得共、弥御堅勝被成御勤珍重奉存候、

然は此間迫間村え御越被成御逼留、去ル廿一日御帰

被成候処、岩手從孫左衛門殿書状御到来被成、御一

覽関え向為持被遣不殘相請取申候、則此方ニても印
形相調、笠松え差出申儀ニ御座候

此間從是御意候趣御承知被下候処、右岩手より之書

状御到来ニ付、最早岩手え不被差遣候之由、被入御
念被仰下之趣致承知之、御丁寧之至御尤ニ奉存候

一大野孫左衛門殿え之御返事、御連名ニて差遣可然奉
存候間、相認致判形遣候間宜思召候ハハ、御判御調

一 来辰之正月廿日より、小熊村え可罷出旨ニ所申合置
候事

小熊村より諸方え之道法大概

岩手え五里	上ノ保え四里	川辺え十一里
笠松え武里	加納え武里余	大垣え武里
西結村え壹里	吉橋村え壹里半	起え武里
迫間え七里半	竹ヶ鼻え壹里	墨俣え八丁
須賀御林え壹里	岐阜え三里	関え八里
名古屋え八里		

戊辰朝鮮人来朝

三使

一八二 朝鮮人来朝小熊川船橋御用日記(二)

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

正使 通政太夫吏 曽參議
知 製 教 趙泰德

副使 通訓太夫弘文 館典翰
知 製 教 任守軒

従事 通訓太夫 館校理
知 製 教 李郭考

(解説) 延享五年(一七四八)正月より六月までの、使節団來訪にともなう諸準備の記録である。一行は前年の一月に朝鮮の都を出発し、翌年四月に江戸到着の予定であつた。しかし實際は美濃国が五月、江戸が六月であつた。この間、笠松役所の船橋などの検分、使節出迎えの諸事打ち合わせなどが行われている。また一方では、万一出水にて船橋流失の場合の、前後策の協議も記述されている。その後、使節団の通過後の五月末日、西濃地方に洪水があつて、番所・垣根・矢来が流失したとある。當時も、自然の脅威に対する配慮が心労の種であつた。

(表紙)

延享五 戊辰歳正月 二

辰歳朝鮮人来朝ニ付小熊川御船橋用諸事留日記

大嶋三郎右衛門

下官	馬	上官	学	軍士
官弟	上	官子	上々	軍士
三百五拾人	人	人	人	拾七人
四人	人	人	人	三壱人
三百五拾人	人	人	人	武拾壱人

一一卯十一月初旬 信使朝鮮之都発足
辰正月 釜山海出帆、日和十分見合對州え四拾八里、
海上一日着、對州より摂州兵庫迄凡武百武拾里程、

是より川船ニテ一日路大坂着、同四月中江戸着

一 献上御鷹八拾居

一 同御馬・芸馬共二八疋

以上

右は從大垣借用写取記之置也

辰之年朝鮮人來朝ニ付諸事留

一 辰正月十九日 大嶋三郎右衛門川辺出立 加納ニ一宿、翌廿日四ツ時前小熊え着、岩手・上ノ保よりも大野孫左衛門殿・所勝右衛門殿追々着、古橋村庄屋共も罷出候事、但三郎右衛門、駕籠・若党壹人、草履取・道具・挾箱・合羽籠、為持候事

一同廿一日より白口藤・藁繩、追々請取申事、但三郎右衛門旅宿利右衛門方藏有之、手寄りニ付三所寄り合、右之品請取申答ニ示合候事

一同日從岩手庄屋清五郎、宰領ニテ繩參候付、古橋金右衛門ニテ為請取、其上ニテ三所罷在相改請取候、尤清五郎え逢申候事

請取申繩之事

高拾六束五把之内
繩六束式把

岩手村分

右は濃州小熊村、舟橋御用繩無相違請取申者也

延享五戌辰年正月廿一日

大嶋雲四郎内

所勝右衛門印

竹中左京内

大野孫左衛門印

児玉直四郎殿

一 辰五月朔日 御献上之御馬八疋、昨夜大垣止宿ニテ、

小熊境川舟橋今朝五ツ半頃、無故障通行相済、對馬守様御家來右宰領先乘也、朝鮮人五人内中官武人駕籠ニ乗リ、次官壹人半乗掛、下官式人半乗懸ケニテ通行、其外釣り荷等も有之事、竹中善吾・大嶋三郎右衛門・所勝右衛門、麻上下着用、番所ニ相詰罷在候處、右對馬守様御家來会釈も無之、右之通首尾好通行相済候、尤道橋掃除等申附、水汲桶ヶ外呑水桶等、御馬口洗等ニ能々申上出置、且又屏風・入幕張り置申候、番所榜・道具等榜候てハ同立上類も無之、先格ニモ無之事候間指出不申、見物人等入込候ニ付、若党共船橋同番所前東境立切申付、無用之人堅ク通シ不申候事、右御獻上御馬之内壹疋病馬有之、余程先え通り申候、是以首尾好通行相済申事、右御獻上

物之儀、今度之舟橋番所等不残出来ニ付、三所より罷出舟橋致通行候、以後御献立物ニ付て、舟橋出来為致候ニハ不及候、朝鮮人通行之日限ニ隨ひ、竹中左京様精御見分御出之様子次第ニて、出来申付候事、今度迎も未出来無之候得は、先頃御鷹之通、従尾張様御馳走ニて相済可申欵、以後其節之様子次第可為事

一同日竹中左京様船橋並番所等出来、為御見分御出被成候付、右御獻上物通り後、尚又掃除等申付、番所榜・道具・水溜桶・盛砂等ニ至迄、朝鮮人通行之通ニ仕立置、竹中善吾・大嶋三郎右衛門・所勝右衛門、麻上下着用、供廻り若党兩人宛道具・挾箱ニて罷出、墨俣迄見越之者差出置、何も番所ニ待合罷在候、古橋村庄屋金右衛門・円六・小熊村御蔵預り利右衛門、三人共ニ先格之通麻上下ニテ、墨俣川端迄御迎ニ罷出候処、左京様墨俣舟橋兼て断置出来ニ付、加納役人中挨拶在之御通り被成候、同夜見越之者追付御出之段、為相知候付、竹中善吾早速墨俣川端迄御迎ニ被罷出、大嶋三郎右衛門・所勝右衛門儀も、前々之通小熊境川向迄御迎ニ罷出候、無程左京様御出被成、

御駕籠より御下り被成、三郎右衛門・勝右衛門兩人、善吾御取合ニテ掛御目ニ、夫より善吾案内ニテ舟橋御見分被成、往還矢來等御見分、夫より番所え御上り被成御覽候、神田又右衛門御跡乗リニテ、三郎右衛門・勝右衛門え挨拶在之、右三人致同道、又右衛門橋場其外見分有之、三郎右衛門・勝右衛門番所前述迄罷越、扣居可申上候、然ル処善吾被罷越、左京可得御意とも申候間、番所へ罷越候様ニと被申、同道番所下ニテ三郎右衛門・勝右衛門下座仕、罷在候処、左京様番所へ上り候様ニ被仰、又右衛門・善吾共ニ左様至り申候得共、其分ニ罷在候処、左京様達て被仰候ニ付、番所之南之端シヘ両人共ニ上り、又右衛門ニも上り被申候様ニ挨拶致シ、又右衛門も上り被申候、左京様被仰候ハ、両人共永々出精共ニテ、船橋番所等其外無紛所能出来申候、昨日ハ大野孫左衛門急病ニテ罷帰り、代り之者竹中善吾差出シ、不案内者ニ候間、別て兩人苦勞共ニ候、隨分被附心引廻給り候様ニ、頼入候由被仰候ニ付、三郎右衛門・勝右衛門共ニ又右衛門へ向、段々御懇意之御意共蒙り、難有仕合奉存候、何分宜御取成奉頼候由申上候処、

三郎右衛門殿・勝右衛門殿・墨俣川辺迄御見送り可
被申由ニ御座候旨、又右衛門被申上候處、入念之事
共ニ候、雨天ニも候間以無用ニ被致、是より引可被
申旨被仰候、兩人又右衛門へ是非共、御見送り可申

上旨申候得共、今日ハ雨天ニも候間帰り急キ申候、
我等為を可被思召候無用ニ被致、是より引可被申旨、
達て御留メ被成御立被成候、然レ共御跡より被越可
申上候、勝右衛門申合候得共、又右衛門・善吾御一
同達て被差留候間、是非ニ之御無用ニ被成候様ニ申
上候、兩人も達て御留メ被申候間、左様ニ御座候ハハ、
是ニテ御暇乞申上候、何分御序之節、急被仰上可被
下旨申達相濟申候、又亦右衛門立帰り、善吾不案内
者御両人へ、吳々堅御頼申入候様、御一同被申候由
ニテ、相應ニ致挨拶帰被申候、善吾ニも立帰り、御
一同見送リニ墨俣休息所迄罷越候間、番所榜・道具
等、乍御世話御仕廻セ被下候様ニと被申、御見送り
被申候事、金右衛門・円六・利右衛門義も、先格之
通り墨俣御休所迄御見送り罷越シ、右庄屋両人より
生鯉壹本献上候、利右衛門鮎鮓一桶献上候、本陣ニ
おいて善吾取成シニテ、披露有之、三人共ニ御目見仕、

其上ニテ懸ケ合之支度被仰付、三人へ御目録被下、
墨俣御立見送り、善吾と一所ニ何も小熊へ帰申候て、
委細金右衛門へ物語承之候處、先格之通ニテ相濟申
事

右之通ニテ左京様出来御見分、先格之通其儀故相済
申事、右善吾旅宿へ帰後、三郎右衛門・勝右衛門同
道罷越、左京様御機嫌能御見分相済、御伺知大慶其
上段々御懇之御意共ニテ、難有奉存候、御家老中へ
以書中御礼可申上候得共、朝鮮人迎候旁御取込可有
御趣差扣申候、其元様迄御礼參上仕候間、御序之刻、
可然奉頼候故申達候事、番所榜・道具等、其外皆之
御見分後、直ニ引払申候也、左京様墨俣川舟橋左之
通出来ニ付、御往来共ニ御通り被成候、佐渡川ハイ
まだ板引ならし候迄ニテ、不残出来無之、御往来共
ニ無御通候、渡船御通行ハ被成よしなり

一五月二日 筠松元メ衆より書状、今須より差越候由
ニテ、西結より竹中善吾方へ返事參候、幸便ニテ到
來文言左之通

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は
小熊川船橋懸渡、以後万一水出等ニテ、流失有之候

ても不及懸直、渡舟を以無差支様可致旨、先達て從御勘定所被仰渡候間、先格ニ隨ひ其節尾州国奉行中へ、渡舟之儀兼て致手当被置候様ニ、次郎九郎より申達被致承知候由申來り、一通り相済居申候、然所此間國奉行中より申來候ハ、舟橋若出水ニテ押流候ハハ、渡舟之手當不申候付、船橋残道具借用ひ候て、早速懸直差支無之様可致候間、各様へ此故兼て致通達置吳候様、次郎九郎方へ申來候ニ付、一通り致承知候段及返答置候、則國奉行中より之來書写、並次郎九郎方より返書之写共、為御心得懸御伺候間、若舟橋押流候節ハ、残り道具之分早速御取集、尾州御役人中え御引渡可被成候、此故各様え拙者共より可得御意旨、次郎九郎申ニ付如此御座候、恐惶謹言

五月朔日

以飛札致啓上候、弥御堅固可被成御勤珍重之御事御座候、然は朝鮮人來朝ニ付、濃州小熊川船橋之儀、懸渡候以後洪水等ニテ、万一流失有之候ても、掛直ニ不及候之間、前々之通渡舟之儀ハ、領分より前々手當致儀ニ候間、此般も前格之通可致手當旨、最前御申越被成候、夫ニ付右場所川幅狭ク、船之差引も不便之通成場所ニ候故、渡船之手當不申付、万一出水ニテ船橋切候ハハ、右船橋之残り道具借用ひ、此方より早速懸直シ差支無之様ニ取斗可申候間、若船橋切候節、右船橋残り道具致借用、無差支様ニ致度旨取扱候、役人共申聞候間、右之趣御承知候上、懸り之御旗本衆へも御通達被下候様致度存候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

四月廿八日

林又左衛門書判
中村甚太郎書判

青木次郎九郎様
右返書

西村佐七判
村上郡八判

大野孫左衛門様
大嶋三郎右衛門様

所勝右衛門様

尾州国奉行中より、青木次郎九郎方え来返状写

御飛札致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重之御事御座候、然は朝鮮人來朝ニ付、濃州小熊川船橋懸渡シ候、

以後水出等ニて万一流失有之候ても、懸直ニ不及候、

前々之通渡舟致用意置可申旨、於江戸表ニ被仰渡候間、小熊川右様之節、渡舟御領分より前々御手当之儀ニ候間、此度も前格之通御手当被成候様、先達て申進候処、夫ニ付右場所川幅狭ク、船之差引も不便通成ル場所ニ候故、渡舟之御手当不被仰付、万一出水ニテ船橋切候ハハ、右舟橋之残り道具御借用ひ、其元より早速御懸直差支無之様ニ、御取斗可被成候間、若船橋切候節、右之通被致度旨、御取扱之御役人中被申候間、小熊川船橋懸り之衆へも、私方より通達致置候様、被成度旨致承知候、出水等ニテ船橋切候節、朝鮮人通行間も無御座候節ハ、右残り道具を以御懸置間も合可申候、万々一通行之先ニ差懸り、懸直シ不罷成ほと之急成ル節之御手当等之儀も、定て御申付置被成候儀と存候間、右御申越之趣を以、竹中左京・大嶋雲八・大嶋雲四郎、役人共可申談候、右為御報如此御座候、恐惶謹言

四月廿九日

青木次郎九郎書判

中村甚太郎様

七 朝鮮通信使來朝記録

林又左衛門様

一 右返書相認、次郎九郎様御出番所、今須宿迄為持遣候、貴札致拝見候、各様弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は小熊川舟橋掛渡候、以後万一出水等ニテ、流失在之候ても懸直ニ不及、渡舟を以無差支様ニ可被成旨、先達て被仰渡候付、先格ニ隨ひ其節尾州御國奉行中え、渡舟之儀兼て御手当被成置候様ニ、次郎九郎様より被仰達、被致承知由申来、一通り相済居申候、然所此間御國奉行中より申来候ハ、舟橋若出水ニテ押流候て、渡舟え御手当無之ニ付、船橋残道具御借り用候て、早速御掛直シ差支無之様ニ可被成候間、拙者共え此段兼て御通達置候様ニ、次郎九郎様え申来候付、一通り御承知被成候段、不及御返答置候、則御國奉行中より之御來書写、並從次郎九郎様御返書之写とも、為心得御見セ被成候間、若舟橋押流候節ハ、残り道具早速取集メ、尾州御役人中ニ引渡可旨、此段次郎九郎様依仰、各様より拙者共え被仰聞候由、委細御紙面之趣得御意奉存候、右為御報如此御座候、恐惶謹言

五月二日

七八五

所勝右衛門判
大嶋三郎右衛門判

竹中善吾判

村上郡八様
西村佐七様

御報

右本書共岩手ニ納在之事

一 昨朔日八幡村庄屋、先格ニテ三所え見廻ニ罷越逢申候間、小熊御用向金右衛門より可申達候間、前々之通可申合旨挨拶申候事

一 同四日 朝鮮人今二日京着、翌三日発足守泊り之由、

今朝宗對馬守様御家來、小熊舟橋通行ニテ金右衛門居合、右之通承之早速三所え申伝候、右繰り合候ては、小熊来ル六日通行之積りニテ候

一 辰六月六日 上ノ保より書状到来、関より相達候、文言左之通

其以後は御無音罷過候、打続不勝之天氣相御座候、弥以御家内御安康被成御座候哉、承度奉存候、此元相替儀無御座候、乍慮外貴意易思召可被下候、併此辺ハ近年之洪水ニテ、田所等も少々宛損シ申候間、

時節柄致難儀候、乍去為差義も無之、植田等も仕廻申候、其御地辺如何哉と奉存候

一 昨日古橋村金右衛門方へ、以使小熊之様子も無心元、委細申越候様申遣候処、如此之返事ニ御座候、来ル十日頃より御出會も致候様申越候、追て御出會日限等ハ、古橋より申上ルニテ可存御座候、右之段幸便も候ハハ、申上候様ニト申越候ニ付、則手紙懸御目申候、万事待貴面之節、万端可得貴意候以上

六月四日

所勝右衛門

大嶋三郎右衛門様

一 古橋村金右衛門より、上ノ保え手紙之趣左之通

右之通先月廿五日西美濃筋洪水、古橋村抔えハ堤切込、金右衛門居屋敷えも水押込候旨、依之小熊表も如何可有之と、早速金右衛門舟ニテ小熊へ出勤候処、高水ニテ番所上四尺余有之、往還通り五・六尺水高有之、箱番所其外小屋・雪隠等、葭垣・矢来に至ル迄押流、漸番人共留置申候由、番所ハくさり・大綱等入有之候ニ付押流不申、皆々殊外損シ申候ニ付、改候て罷帰り、其後又罷出大綱等メサセ申候旨、依

之三所共ニ帰國、余程前方より立会御相談申上度由、此故早速御案内可申上候得共、古橋村共ニ右之通ニて彼是取込、明日ニも可申上と存候処、御状被下則其後ニ申上候、西結村御役所えも、笠松御役人衆先月晦日より御出勤、諸事被仰付候間、御三所ニも十日・十一日頃より、御立会被成候様ニ被成間敷候哉、岩手へも申遣シ日限等相極メ、御両所へも可申上候旨申來り、則金右衛門手紙一読候ハハ、勝右衛門殿へ戻シ申候事

一同日上ノ保迄返事遣候、右之通委細致承知候、拙者儀も無心元存候得共、金右衛門油断有之間敷と、左右を相待罷在候、追て日限金右衛門より申来次第、可罷出候旨申遣候事、尤闕へ向遣候

一八三 小熊川船橋諸事覚書

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所藏

(解説) 船橋架け渡しによる諸材料のうち、特に白口

児玉直四郎殿

藤・藁繩の、各領主からの到着状況の記述である。これらは延享五年（一七四八）正月から、二月にかけて現地に到着している。それにもともない、笠松役所・各領主の代表者、各村の庄屋との交流のことから、江戸幕府役人による旅館・道路・船橋の検分のことなどが記されている。人脈關係の重要性をうかがうことができる。

(表紙)

延享四年卯十二月

覚書

大嶋三郎右衛門

白口藤並繩請取覚
請取申繩之事

高拾六束五把之内
一繩六束弐把

右は小熊川舟橋御用繩、無相違請取申候以上

延享五戌辰年正月廿一日

岩手村分

大嶋雲四郎内

大嶋雲八内 所勝右衛門印
大嶋三郎右衛門印

竹中左京内 大野孫左衛門印

右は岩手庄屋清五郎、持參請取候也

ヘ相渡申候、恐惶謹言

正月廿二日

百木より白口藤來之節、役人衆より來状左之通
未得御意候得共、一筆致啓上候、然は朝鮮人就來聘、
小熊川舟橋御用白口藤拾五駄、佐渡守領内より差出
候、左様被仰付候間今度差進候、御手納可被下候、
委細申合使之者口上候、恐惶謹言

五月十八日

鈴木主馬

曾我郷右衛門

陶山直右衛門

曾我郷右衛門様

鈴木主馬様

陶山直右衛門様

所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

竹中左京様

御役人中様

大嶋雲八様

御役人中様

大嶋雲四郎様

御役人中様

貴札致拝見候、其後未得御意候、就は朝鮮人來朝ニ
付、小熊川舟橋御用白口藤拾五駄、佐渡守様御領分
より、被差出候様被仰付候ニ付、今度被罷越請取申
候、委細御使御口上共ニ致承知候、別紙請取書御使

白口藤

請取申白口藤之事

拾五駄

右は濃州小熊川舟橋御用、遠山佐渡守様御領分より

被差出、無相違請取申者也

延享五年正月廿二日

大嶋雲四郎内

所

勝右衛門

大嶋雲八内

所

勝右衛門

竹中左京内

所

大嶋三郎右衛門

所

大野孫左衛門

所

坂下庄村屋
忠左衛門殿

油井庄村屋
丈助殿

請取申繩之事

高拾六束五把之内

繩拾壹束三把

濃州関ヶ原宿並玉村・山中

一繩九束四把

村・藤下村分

但シ川辺村
柳井村

右は濃州小熊川船橋場御用繩、無相違請取申者也

正月廿二日

所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

古山還右衛門殿

請取申繩之事

高拾六束五把之内

繩拾壹束三把

濃州關ヶ原宿並玉村・山中

一繩九束四把

村・藤下村分

但シ川辺村
柳井村

正月廿二日

所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

吉田金左衛門殿

佐藤太次右衛門殿

小嶋甚助殿

上ノ保村分

請取申繩之事
高五束之内

繩三束七把

正月廿二日

川辺・柄井ハ半十郎・徳兵衛附添、笠松迄舟ニテ下

り、笠松より馬附ニテ、小熊利右衛門宅へ持參請取、
関郷ハ庄屋代組頭庄兵衛附添、墨俣川迄舟ニテ下り、
夫より馬附ニテ、右利右衛門宅へ持參請取、小嶋甚
助より三郎右衛門方へ手紙壹封到来、即刻返事認遣

候

松原五郎右衛門殿

右は庄屋儀左衛門持參請取

七 朝鮮通信使來朝記録

請取申繩之事

七八九

一繩八拾壹束六把

濃州岩村分

右ハ小熊川船橋御用繩、無相違請取申者也

正月廿三日

御三所
所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

庄屋
定平殿

正月廿三日

所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

小林太郎兵衛殿

請取申繩之事

請取申繩之事

一繩式拾壹束六把

正月廿三日

右は濃州右同断

一繩拾壹束四把
右同断

正月廿四日

所勝右衛門印

大嶋三郎右衛門印

大野孫左衛門印

松平隼人様御内
深尾五郎兵衛殿

遠山七之丞様御内

村上敷藏殿

清水官太夫殿

一白口藤・藁繩、去廿一日より同廿四日迄、不残請取

申事、依之先格之通笠松御役所へ、為御案内書状遣

候、文言左之通

請取申繩之事

一繩壹束三把

右同断

一筆致啓上候、余寒御座候得共、各様弥御堅固可被成御勤珍重奉存候、然は先達て御触被成候通、白口藤・藁繩、御書付之通無相違、昨廿四日迄請取申候、

為御届如此御座候、恐惶謹言

正月廿五日

御三所御名ハ記不申事
三人判

佐藤丈太夫様

村上郡八様

西村佐七様

右之通為触半切書状相認、古橋村庄屋只右衛門二、笠松御役所へ為持遣候、右返事出来

貴札致拝見候、余寒御座候得共、各様弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然は先達て相触候、白口藤・藁繩、書付之通無相違、昨廿四日迄ニ御請取相済候由、為御届御紙面之趣致承知、被入御念候御儀奉存候、右為御報如此御座候、恐惶謹言

正月廿五日

元メ
三人判

大野孫左衛門様

大嶋三郎右衛門様
所勝右衛門様

伊藤忠藏
狩野藤左衛門

別紙を以得御意候、然は此間ハ被入御意、古橋村金右衛門、御伝言ニ預り忝奉存候、其節御見事之鮓壺桶、御酒一樽、被遣御意思召寄、千万御厚志之段忝奉存候、乍序右御礼申上候以上

正月廿六日

伊藤忠藏
狩野藤左衛門

西結村より書状到来左之通

以切紙致啓上候、各様弥御堅固被成珍重奉存候、然

は朝鮮人旅館・舟橋・道筋共、並御手伝御普請所為御見分、堀江荒四郎様當廿五六日頃、江戸表御出立候由、笠松役所より只今申來候間、為御心得申懸候、尤東海道美濃路え、御移被成候積之由申越候、左候得は、余り御延引は有之間敷候、猶又御先触等も參候ハハ、其節可得御意候間、左様御心得可被成候、右為可得御意如此御座候以上

正月廿六日

大野孫左衛門様

大嶋三郎右衛門様

所勝右衛門様

右は廿六日之夜到来、使之者帰り遅き候ニ付、先使之者へ請取書認遣候、尤右御返事ハ、明日從是可存其意旨、使之者へ申わけ戻候。

右返事翌十七日、古橋村庄屋代唯右衛門ニ為指遣候、昨夜は御手紙致拝見候、各様愈御堅固被成御勤珍重奉存候、然ハ朝鮮人旅館・道筋、並御手伝御普請所

為御見分、堀江荒四郎様當月廿五六日頃、江戸御出立之由、笠松御役所より被仰越候ニ付、為心得被仰下候由、尤東海道美濃路、御移被成候御積之由、左候得ハ、余り御延引ハ有之間敷、尚又御先触等も参考候ハハ、其節可被仰下候旨、御紙面之趣致承知候、悉奉存候、右御報為可得御意如此御座候以上

正月廿七日

所勝右衛門

大嶋三郎右衛門

大野孫左衛門

狩野藤左衛門様

伊藤忠藏様

御別紙致拝見候、然ハ此間古橋村金右衛門を以、得御意候ニ付、御丁寧之御紙面、其節も御懇ニ被仰下忝奉存候、右為御報如此御座候以上

同日

所勝右衛門

大嶋三郎右衛門

大野孫左衛門

両人様

一正月廿八日御舟橋御番所、請合普請申付入札、古橋村大工甚吉勧上候、代金八匁三分落札ニテ渡候、手付金三両只今相渡候、大野孫左衛門殿取替被申事、則請合証文令差出、請取写置候、本紙ハ岩手ニ納ル

一正月廿八日之笠松元メ衆より之書状、二月朔日夜四ツ時、西結村之者持參到来、直ニ笠松ヘ向參候間、返事遣候様と可差遣と申候得共、夜更急故元メ衆迄

請書遣候

覚

一御状箱壹ツ請取申候、御使之者夜更罷越候急故、御返事追て從是可得御意候、為念如此御座候以上

二月朔日

大嶋三郎右衛門印

元メ衆三人様

右笠松より來状写

一筆致啓上候、余寒御座候得共、各様弥御堅可被成御勤珍重奉存候、然は朝鮮人旅館、並往還船橋為御見分、堀江荒四郎様先月廿五六日頃、江戸御見分、堀江荒四郎様当月廿五六日頃、江戸表出立被成候由、此度江戸表より申来候、小熊川舟橋御見分之節ハ、御役人中御指出可然奉存候、勿論此方よりも役人共指出可申候、右之段各様迄、拙者共より可得御意旨、次郎九郎申ニ付如此御座候、恐惶謹言

正月廿八日

西村佐七判
村上郡八就御用致在出候

佐藤丈太夫判

右返事案文左之通

貴札致拝見候、如仰未余寒御座候得共、各様弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然ハ朝鮮人旅館、並往還船橋為御見分、堀江荒四郎様先月廿五六日頃、江戸御出立被成候由、小熊川舟橋御見分之節ハ、其表御役人被指出候間、拙者共ニも罷出候様、次郎九郎様仰ニ御座候旨、御紙面之趣承知仕候、恐惶謹言

二月六日

大野孫左衛門判
大嶋三郎右衛門判
所勝右衛門判

元メ衆三人様

一某事笠松御役所へ未罷出、元メ衆へも知ル人ニ不罷成候間、今日小熊より駕籠ニテ、若党壹人、ぞうり取・罐・挾箱・合羽駕籠ニテ罷越候、山形屋傳兵衛方へ落着、右元メ衆へ其返事を、若党ニ為持遣候、追て宿之傳兵衛役所へ案内ニ遣候處、只今加納より御使者有之候間、暫ク御見合可被成候、従是御案内可申旨申、傳兵衛帰候ニ付、相尋罷在候處、加納御使者相済候間、御勝手次第御出可被成旨申来候処、

大野孫左衛門様
大嶋三郎右衛門様
所勝右衛門様

合不申越候、追て引合可得御意旨被申候事

傳兵衛を案内ニ召連、某麻上下、若党袴・羽織・も
もたち・道具挾箱ニテ歩行、御役所へ罷越候、御玄
関へ上り居申候處、取次出被申候ニ付、自より御機
嫌伺候以上

一八四 小熊川船橋入用帳

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所蔵

大嶋雲八家來大嶋三郎右衛門、今度朝鮮人御用ニ付、
小熊村へ罷越相談罷在候、依之為伺御機嫌、御玄関
迄參上仕候、次郎九郎様御留主ニテ、被成御座候間、
申上置候、扇子壱箱差上候間、御帰り後宜御附ケ所
可被申旨申候得ハ、扣居候様取次申ニ付、見合罷在
候処、追付取次口被申、御出候段留置、次郎九郎様
罷帰候ハハ、可申達旨被申候、扱元メ衆御用御透ニ
御座候ハハ、得御意度旨申入候処、追付遂御用旨ニテ、
御玄関次之間へ取次同道、通シ被申候ニ付、罷越居
候処、追付元メ佐藤丈太夫・西村佐七、罷出被申、

右之趣ニ付相応ニ挨拶候

(解説) 船橋架け渡しにともなう準備材料のすべてと、
それに要した必要経費の明細である。船橋が川が乾水となつた場合は、川下で水をせきとめたとあり、それに要した人足・費用などの記述もある。これらの必要経費は、幕領・旗本領などの村々へ割り当てられ、各村々では、相当の負担となつたことが想像される。

〔表紙〕
延享五年

小熊川船橋入用帳

辰六月

一小熊川舟橋出来之上、萬一出水ニテ橋流候といへ共、
懸直シニ及ヒ不申事、先格ニテ御座候、其節ハ尾張様
より渡舟御出シニテ御座候、其段尾張様御役人衆へ、
次郎九郎様より御引合有之候、此段御引合御座候哉
と相尋候得ハ、いまだ引合も無之、次郎九郎より示

一舟橋式拾式問分
押竹 小熊川御船橋入用覚
太サ六寸廻

代銀九匁三分	同断	一釘	代銀九匁三分	同断	代銀九匁三分	同断	代銀九匁三分	同断	代銀九匁三分
長五寸			長五寸		長五寸		長五寸		長五寸
代銀拾匁			代銀三拾匁		代銀三拾匁		代銀三拾匁		代銀三拾匁
同断			同断		同断		同断		同断
一垢取柄杓			一高桃燈		一高桃燈		一高桃燈		一高桃燈
代銀武拾匁			代銀三拾九匁		代銀三拾九匁		代銀三拾九匁		代銀三拾九匁
同断			同断		同断		同断		同断
一石碇			一高桃燈台		一高桃燈台		一高桃燈台		一高桃燈台
代銀三拾九匁			代銀四拾壹匁六分		代銀四拾壹匁六分		代銀四拾壹匁六分		代銀四拾壹匁六分
同断			同断		同断		同断		同断
一式拾目蠟燭			一式拾目蠟燭		一式拾目蠟燭		一式拾目蠟燭		一式拾目蠟燭
代銀百五拾匁			代銀百五拾匁		代銀百五拾匁		代銀百五拾匁		代銀百五拾匁
同断			同断		同断		同断		同断
一竹明松			一竹明松		一竹明松		一竹明松		一竹明松
代銀四拾五匁			代銀四拾五匁		代銀四拾五匁		代銀四拾五匁		代銀四拾五匁
同断			同断		同断		同断		同断
一明キ俵			一明キ俵		一明キ俵		一明キ俵		一明キ俵
代銀四拾匁			代銀四拾匁		代銀四拾匁		代銀四拾匁		代銀四拾匁
同断			同断		同断		同断		同断
一惣矢來竹・杭木・藤細繩共			一惣矢來竹・杭木・藤細繩共		一惣矢來竹・杭木・藤細繩共		一惣矢來竹・杭木・藤細繩共		一惣矢來竹・杭木・藤細繩共
長八尺	高六尺	長八尺	高六尺	長八尺	高六尺	長八尺	高六尺	長八尺	高六尺
三百本	三百本	三百本	三百本	三百本	三百本	三百本	三百本	三百本	三百本
武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本	武拾本
三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九	三拾九
代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁
同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断
一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹	一川堰竹
太サ六寸廻	太サ六寸廻	太萨六寸廻							
六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本	六拾本
百	百	百	百	百	百	百	百	百	百
代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁	代銀八匁
同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断
此三ヶ来朝之節、乾水ニ付、川堰申附候、尤来朝之節、堰道具出水致流失候故、此度は損料ニテ申付候事	させ								
右同断	右同断	右同断	右同断	右同断	右同断	右同断	右同断	右同断	右同断
一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共	一川堰入用竹木損料俵武百共
代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁	代銀三拾武匁
同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断
一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋	一繩小屋
代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁	代銀九拾五匁
同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断	同断
一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺	一屋根取葺
梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半	梁行武間半
但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共	但松丸太・竹葺繩共
小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川	小熊川
舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所	舟橋番所
七	朝鮮通信使來朝記録	七	朝鮮通信使來朝記録	七	朝鮮通信使來朝記録	七	朝鮮通信使來朝記録	七	朝鮮通信使來朝記録
九	五	九	五	九	五	九	五	九	五

右は帰國之節も乾水ニ付、川堰申附候、尤來朝之節、堰道具出水致流失候故、此度は損料ニテ申付候事

させ

右同断

一橋掛方惣大工手間飯米共

代銀一口三拾武匁五分

代銀百六拾八匁

右入用

代銀九拾六匁弐分

一立柱 長弐間四寸角

拾三本

代銀三拾弐匁五分

一ゑつり竹 太サ五寸廻

五拾本

一桁

長弐間三寸三四寸角

拾一本

代銀拾六匁

一屋根押竹 太サ四寸廻

六拾本

一椽かまち

長九尺幅四寸厚弐寸

三本

代銀四匁

一葭簀 代銀式拾七匁

拾八枚

一上遣竹

太サ七寸廻

拾六本

代銀八匁

一簣かき竹 壱尺五寸廻

拾八束

代銀拾五匁

一おひき 長壹丈

五本

代銀七匁五分

一板持 長弐間幅五寸厚壹寸

拾六本

代銀式拾弐匁

一檼 長弐間幅三寸厚八分

拾壹挺

代銀拾弐匁

一竹垂木 太サ六寸廻

三拾本

代銀拾匁

屋根拾壹坪取葺
長壹尺五寸幅三寸

三千八百五拾枚

一縁り取

代銀式拾四匁弐分

拾壹枚

一 蓬

代銀三匁三分

拾 壱枚

代銀百五拾匁
メ銀壹貫六百拾七匁三分

但飯米共二

一 中水桶

代銀武拾匁

諸色払物代引

一 手桶

代銀武拾武匁

銀百五拾匁七分七厘

残て

一 水溜桶

代銀武拾匁

此金武拾四兩壹分ト銀拾壹匁五分三厘

一 鐵立

長武間高六尺

右は小熊川御船橋入用並、御番所入用等如此御座候、
前格之通御料・私領、組合之村々え御割賦被仰付、
可被下候以上

一 番人鐵立

長壹間高六尺

延享五年辰六月

一 弓鉄炮立

長九尺高三尺五寸

代銀八匁

大嶋雲四郎内
勝右衛門

一 葦垣

但葭杭竹・藤細繩
番所前後葭垣共

佐藤丈太夫殿

大嶋雲八内
大嶋三郎右衛門

竹中左京内
竹中善吾

代銀百六匁

一 箱番所

長壹間幅五尺
木代・葺板・竹藤代共

村上郡八殿

西村佐七殿

代銀三拾五匁

一 御番所・箱番所並榜道具・建大工作料

六 拾人

但シ壹艘ニ付、銀六拾九匁九分四厘三毛、日数六

十五日之積如此

御料所

一八五 小熊川橋船割合帳

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所藏

一船式艘式分八厘

古橋村

西方村 夕田村

鎌物師屋村

迫間村

此銀百五拾匁四分四厘

鎌物師屋村

大洞村

池田郡
八幡村

古橋村

西方村

武儀郡
山村

一船六艘

柄井村

下川邊村

山田村

上川邊村

鹿塩村

石神村

大山村

瀧田村

絹丸村

池尻村

池尻村

武儀郡
山村

石神村

絹丸村

池尻村

武儀郡
山村

</div

一八六 小熊川船橋入用割賦帳

○町内中川辺	矢嶋弓男氏所藏
池尻村	大西幡橋村
池山田村	大洞村
大瀧田村	夕田村
大山山村	迫間村
大丸山村	鹿井村
絹塩村	楳村
大井村	大井村
下川邊村	上川邊村
石神村	右村々
庄屋	右村々

(解説) 船橋用の板・材木、それに番所などの諸入用の明細である。これらの費用は、各村々の石高に応じて金銭にて割り当たられたが、臨時の必要経費として、村々にとっては高負担となっていた。

(表紙)

延享五辰年七月

濃州小熊川船橋諸入用割賦帳

高壹万五千五百七拾八石五斗壹升七合六勺
銀壹貫四百六拾六匁五分三厘

但高百石二付
銀九匁四分壹厘四毛

小熊川船橋番所並諸入用

此割賦

高式百五拾六石八斗九升
銀式拾四勺壹分八厘
高式百石
銀拾八勺八分三厘
高六百七拾壹石壹斗八升四合
銀六拾三勺壹分六厘
高百九拾四石式斗式升
銀拾八勺八分八厘
高六百四拾五石八斗七升
銀六拾勺八分
高五百壹石三斗
銀四拾七勺壹分九厘
高五百八拾五石九斗
銀五拾五勺壹分六厘
高三百七拾四石壹斗六升
銀三拾五勺式分式厘
高四百四拾壹石壹斗三合
銀四拾壹勺五分三厘
高五百三拾六石五斗六升八合
銀五拾勺五分壹厘
高五百拾石三斗
銀四拾四勺壹分五厘
高三百九拾七石式斗四升
銀三拾七勺三分九厘
高百壹石九斗六升
銀九勺六分
高百式拾八石七斗五升
銀拾式壹分式厘
高式百九拾五石九斗
銀式拾七勺八分六厘
高式百式拾七石四斗六升
銀式拾壹勺四分壹厘

大洞村
大 洞 村
武儀郡
山田村
山 田 村
上河邊村
上 (川) 河 邊 村
下河邊村
下 河 邊 村
栃井村
栢 井 村
大嶋雲八知行所
大 嶋 雲 八 知 行 所
竹中左京知行所
竹 中 左 京 知 行 所
銀百四拾壹勺式分壹厘
銀百四拾壹勺七分
高千五百石
高 千 五 百 石
銀四百七拾勺七分
高四百七拾壹石壹斗三合
銀四拾壹勺五分三厘
高五百三拾六石五斗六升八合
銀五拾勺五分壹厘
高五百拾石三斗
銀四拾四勺壹分五厘
高三百九拾七石式斗四升
銀三拾七勺三分九厘
高百壹石九斗六升
銀九勺六分
高百式拾八石七斗五升
銀拾式壹分式厘
高式百九拾五石九斗
銀式拾七勺八分六厘
高式百式拾七石四斗六升
銀式拾壹勺四分壹厘

高四百五拾四石壹斗八升
銀四拾式勺七分六厘
高五百石
高 五 百 石
銀五勺五分壹厘
高千五百石
高 千 五 百 石
銀四百七拾壹勺七分
高四百七拾壹石壹斗三合
銀四拾壹勺五分三厘
高五百三拾六石五斗六升八合
銀五拾勺五分壹厘
高五百拾石三斗
銀四拾四勺壹分五厘
高三百九拾七石式斗四升
銀三拾七勺三分九厘
高百壹石九斗六升
銀九勺六分
高百式拾八石七斗五升
銀拾式壹分式厘
高式百九拾五石九斗
銀式拾七勺八分六厘
高式百式拾七石四斗六升
銀式拾壹勺四分壹厘

大嶋雲八知行所
大 嶋 雲 八 知 行 所
竹中左京知行所
竹 中 左 京 知 行 所
銀百四拾壹勺式分壹厘
銀百四拾壹勺七分
高千五百石
高 千 五 百 石
銀四百七拾勺七分
高四百七拾壹石壹斗三合
銀四拾壹勺五分三厘
高五百三拾六石五斗六升八合
銀五拾勺五分壹厘
高五百拾石三斗
銀四拾四勺壹分五厘
高三百九拾七石式斗四升
銀三拾七勺三分九厘
高百壹石九斗六升
銀九勺六分
高百式拾八石七斗五升
銀拾式壹分式厘
高式百九拾五石九斗
銀式拾七勺八分六厘
高式百式拾七石四斗六升
銀式拾壹勺四分壹厘

右は当辰朝鮮人來朝ニ付、小熊川船橋御入用板・材
木・苧綱之外、番所其外諸入用前々通、御料・私領村々
割賦書面之通ニ候間、來ル十八日迄ニ笠松御役所え、
急度可致持參候、則舟橋掛渡シ役人より、指出候入用
帳壹冊、相添相廻候間、可得其意候、此廻状刻付を以
早々相廻シ、留り村より可相返候以上

辰七月九日

笠松
御役所

右村々

庄屋
年寄

古橋村之内

西方村之内

迫間村之内

鑄物師屋村之内

一八七 朝鮮人来朝入用掛物

○町内中川辺

矢嶋弓男氏所藏

上納

外ニ大繩壹丈尋五拾繩宛、九束壹把是又領分より

取立、右船橋場所え差出ス

一米拾六石八斗式升

此代金拾八両三分ト銀八匁九分三厘式毛

但金壹両ニ付、米八斗九升替

右是は御用中家來、増人雇給米扶持方、並郷人足役
米共

合金八拾四両式分ト銀拾武匁九分四厘五毛

右之通御座候以上

亥六月

(表紙)

朝鮮人来朝之節諸入用掛物

寛延元辰年朝鮮人来朝之節諸入用金高之覧

一金三拾弐両ト銀六匁八分四厘九毛

右是は萬調物修覆物、所々え之飛脚入用御用ニ付、
月々罷出候家來共え之手當、尾州並笠松御役所、小
熊川船橋場所出役、諸雜用共

宝暦拾四年未申年朝鮮人来朝之節諸入用金高之覧

一金五拾壹両式分ト銀六分八厘七毛

右是は萬調物修覆物ニ付、所々え飛脚入用御用ニ付、
月々罷出候家來共え之手當、尾州並笠松御役所、小
熊川船橋場え出役、諸雜用共

一金四拾壹両弐分ト銀拾三匁五分壹厘六毛

右是は小熊川船橋諸入用掛り、三ヶ所割合此方出銀
之分、内金弐拾壹両ト銀拾四匁三分七厘、領分より
上納

外ニ大繩壹丈尋五拾繙宛、九束壹把是又領分より
取立、右船橋場所え差出

一米弐拾壹石八斗四升

此代金弐拾壹両壹分ト銀九匁七分五厘

但金壹両ニ付、米壹石弐斗替

右是は御用中家来、増人雇給米扶持方、並郷人足役
米共

合金百拾四両弐分ト銀八匁九分八毛

右之通御座候以上

亥六月